

Class

深い学びにいたる授業

～「深い学びの技法」を基に構成する
学習過程に着目して～

- 石井 英真 様 (京都大学大学院) による
「深い学び」についての特別寄稿を掲載
- 教科・領域の指定研究による「深い学びに
いたる授業」の提案を紹介
- 県中教研の今年度の「3つの重点」に
についてのお知らせ



新潟県中学校教育研究会

Class

深い学びにいたる授業

「深い学びの技法」を基に構成する
学習過程に着目して

第10号 2025年(令和7年)10月

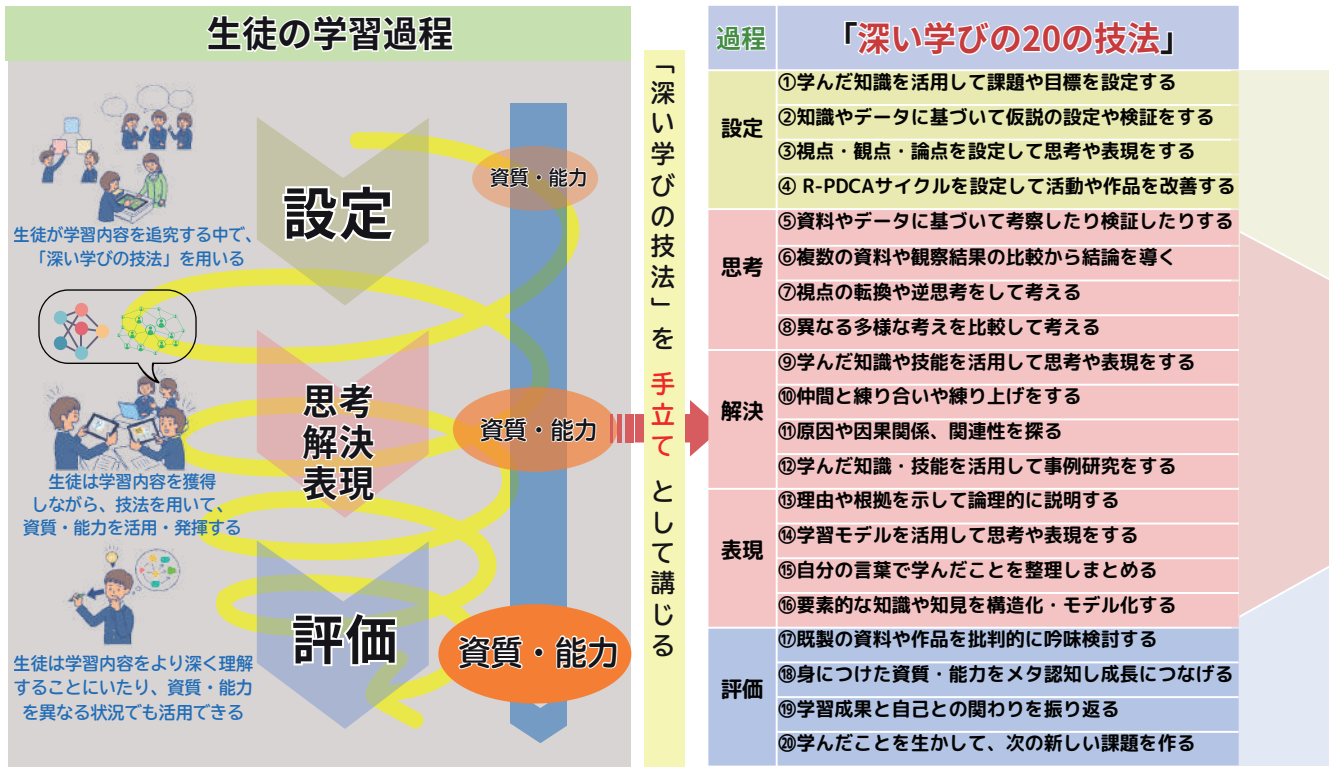
ISSN 2189-8111

新潟県中学校教育研究会 研究主題 深い学び

先生方とともに、「よりよい授業」を
今年度は3つの重点から

「深い学びの技法」を基に、学習過程の

重点1 生徒の学び



重点2 教師の学び

ファシリテーションを取り入れた会員の「深い学び合い」を推進します！

先生方の「深い学び合い」のために、県中教研が心掛けることはどんなことでしょうか？

学びの相似形

「学び合い」に大切なことは、参加者同士のインプットとアウトプットの量を増やし、話し合いの質を高めることです。

検討会や協議会の目的に応じて、ファシリテーション（話し合いを促進する技法）を取り入れることで、参加者のインプットとアウトプットの量や質が高まり、研究の理解が促進されます。参加者が自分事として、研究を捉えることができます。

県中教研では、検討会や協議会などでファシリテーションによって、「深い学び合い」の姿を実現し、会員が生徒と同じように「深い学び合い」に向かうことを大切にしています。これは生徒が深い学びにいたる姿と軌を一にするものです。

このように私たち教師と生徒の学びは「相似形」なのです。

新潟県中学校教育研究会 ホームページをぜひご活用ください

新潟県中学校教育研究会

県中教研について
授業づくり
授業研究
刊行物
お知らせ

新潟県中学校教育研究会は令和5年に創設60周年を迎えました。60周年のときに新潟県全域でファシリテーションを主な手法として、「学び合う授業」を開発して参りました。「学び合う授業」から「主体的・対話的で深い学び」そして、「深い学び」にいたる授業」を目指して参りました。今後も、県の教育方針と軌を一にする、新潟県全域で会員一人一人の研究意欲の高揚と資質・能力の向上を図ってまいります。

深い学びにいたる授業

県中教研について

授業づくり

指定研究

刊行物

授業情報誌Class

- ☒ デザインを一新し、見やすさ、使いやすさを重視しています。スマホ、タブレット画面にも対応しています。
- ☒ 「授業づくり」のコーナーを設置し、先生方の授業づくりに役立つ情報を発信します！
- ☒ 創設60周年記念大会のオンデマンド配信、過去のClassのバックナンバーを閲覧できます！

【URL&QRコード】
<https://niigata-chukyoken.jp/>

新潟県中学校教育研究会

【令和7年度】
会長 金山 光宏(新潟市立白新中学校 校長)
副会長 江口 賢哉(妙高市立妙高中学校 校長)
副会長 玉木 暢(長岡市立東中学校 校長)
理事長 鈴木 善士(新潟市立木戸中学校 校長)

新潟県中学校教員を会員とする教育研究団体です。昭和38年に発足し、令和5年に創設60周年を迎えました。

県下に19の郡市中教研を置き、15の教科・領域部会によって研究を推進する組織です。毎年のべ18～20の郡市に、教科・領域を指定し、2年間の「指定研究」を行っています。

授業情報誌 Class・深い学びにいたる授業

発行日 令和7年10月1日

発行者 新潟県中学校教育研究会 事務局
〒950-0088 新潟市中央区万代1-3-30
万代シティホテルビル
(万代シルバーホテル)3階

TEL・FAX 025-290-2251
E-mail ken-ckk@niigata-inet.or.jp

印刷 有限会社東京プリント社
表紙・デザイン・イラスト 上村 慎吾(県中教研事務局長)

ISSN 2189-8111

にいたる授業

考え、学び合い、高め合うことを目指します
先生方の授業づくりをサポートします

充実を図り、生徒の資質・能力を育成します！

授業のイメージ

設定の過程

生徒が学習対象に対する目的や課題、見通しをもてるように、技法（左表①～④）を手立てとして講じる

前の授業でうまくいったから、今日もこの観点で課題を追ってみよう！

前の授業で習った知識で予想してみたけど、結果が違う……。何てだろう？

AさんとBさんの解釈はなぜ違うのですか？2人の根拠を比べて考えてみましょう。

「思考・解決・表現」の過程

生徒が教科等の資質・能力を存分に活用・発揮しながら、課題解決を図れるように、技法（左表⑤～⑯）を手立てとして講じる

みんなはどんな結果になったのかな？みんなが調べた結果を比べて考えてみよう。

他の人はどんな解決方法考えたのかな？今日は、同じ解決方法の人と考えを交流してみよう。

A、B、Cの結果から、Dの共通性が見えてきた。だから、このような法則が成り立っているな。

評価の過程

生徒が資質・能力の高まりを実感しながら、学んだことを俯瞰したり、振り返ったりできるように、技法（左表⑰～⑳）を手立てとして講じる

他の人のアドバイスをもとにすると、自分が作った作品は、Aの視点がもっと必要な。再検討してみよう。

今回の単元で事象を考える視点は、別の単元を考える時も、有効な視点になりそうだな。

重点3

中教研の活動

持続可能な研究活動の在り方を目指した改善を図ります！

令和6年度、「指定研究の在り方改善プロジェクト」を設置し、理事会、評議員会での審議を経て、今年度から指定研究の在り方を改善していきます。

令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度
令和7・8年度指定研究 →移行期間－新支援制度の導入可能		令和8・9年度指定研究 →移行期間－新支援制度の導入可能 ※移行期間に、新支援制度のヒアリングを実施し、大綱を作成する(各地区郡市中教研会長会、各地区校長会、指定研究関係者)。	
		令和9・10年度指定研究 ①指定研究の部会の変更 生徒指導と進路部会がなくなり、15部会から13部会に。 ②指定研究の地区ローテーションの変更 全ての教科・領域が4年に1度の指定研究に。 ③支援制度の拡大(任意で活用可能) 同じ地区内の郡市や隣接する他地区の郡市から研究推進の委員委嘱が可能に。	

指定研究とは？

各都市の研究推進委員会による「深い学びにいたる授業」の授業研究、研究会による授業提案などを通して、会員一人一人の研修意欲の高揚と資質・能力の向上を目指す事業です。

Class

2024年12月25日、中央教育審議会への諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が出され、次期学習指導要領の改訂の議論が始まりました。次期学習指導要領は、令和12年度（2030年）を目途に小学校から順次実施されていく予定です。

Class第10号では、「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会」の委員である石井英真様から特別寄稿を賜りました。一緒にこれからの新たな学びを考えましょう。

これからの新たな学び

Class 10号発刊！

Classが綴る県中教研 研究の歩み



この度、県中教研のClassは、創刊号から第10号発刊を迎えました。指定研究の授業情報誌であるClassを通じて、「学び合う授業」や「深い学びにいたる授業」について、会員の皆様に紹介してきました。

これまで多くの研究推進委員会の取組を広く発信することができました。これからも研究推進委員会のすばらしい研究を発信し、会員の皆様の資質・能力の向上を支援できるよう取り組んで参ります。

新潟県中学校教育研究会
指定研究の授業情報誌

第10号

2025年(令和7年)10月

Class

深い学びにいたる授業

～「深い学びの技法」を基に構成する
学習過程に着目して～

- 石井 英真 様(京都大学大学院)による
「深い学び」についての特別寄稿を掲載
- 教科・領域の指定研究による「深い学びに
いたる授業」の提案を紹介
- 県中教研の今年度の「3つの重点」に
ついてのお知らせ



授業情報誌 Class 第10号発刊にあたって

創刊から10年を迎える 「授業情報誌 Class」に思うこと

今年度も「指定研究の授業情報誌 Class」を、会員の皆様にお届けすることできて嬉しく思います。発行に向けて、執筆等にご尽力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

また、今回は特別寄稿として、京都大学大学院准教授 石井英真様より玉稿を賜りました。令和6年12月に文部科学大臣から中央教育審議会にむけた諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が出され、次期学習指導要領改訂に向けた議論が進む中、『次期学習指導要領改訂に向けた議論のポイントを整理しつつ、学習内容の重点化が必要とされる背景を明確にする。そして、重点化を行う際の指針やそれが深い学びの実現にどうつながるかについて述べたい。』と始まる石井様からいただいた論文は、今を見つめ、未来を指向し、深い学びにいたる授業の実現を目指している、私たち新潟県中学校教育研究会の取組の拠り所となるものと、大変ありがたく感じております。公私にわたってご多用の中、示唆に富んだ論文をお寄せいただいた石井様に心より感謝を申し上げます。

さて、本誌の画期的な点は、指定研究の2年次研究会の開催の前に発行するという点です。単なる研究のまとめの冊子ではありません。

事情があって、開催期日を早い時期に設定せざるを得ない研究会を除き、多くの場合、会員はこの授業情報誌 Class を研究会に持参し、各教科・領域のこれまでの研究実践の足跡をたどりながら参加します。いわゆる研究校などの研究会では、研究紀要を研究会当日に合わせて発行し、参会者が研究の取組を目の前の授業で確かめることができるようにします。さらには、研究の内容や方法を、参会者が自校化することまでも期待して提案するのです。

新潟県中学校教育研究会

会長 金山 光宏

(新潟市立白新中学校 校長)



私たちの研究は、広域な県土において、県内各地に会場校が分散し、開催日もそれぞれに異なります。そんな状況の中、1つの学校が研究会に研究紀要を用意して研究会を開くがごとく、この授業情報誌Classによって、県中教研の研究の取組が、研究会当日の生徒の姿で確かめられ、会員はそれぞれの学校に持ち帰り、明日からの実践に生かすことを可能にしています。

そんな授業情報誌Classも、今回の発行が10号となります。創刊から10年を迎えるのです。編集の意図はその時々を反映し、工夫しながら発行を重ねてきているものと捉えています。

しかしながら一方で、授業情報誌Classが映し出す『いつの時代も変わらない風景』があります。それは、「県中教研の研究推進は、全県一枚岩である」ということと、「会員は、常に、ひたむきな研究実践を積み重ねている」ということです。このように考えると、授業情報誌Classは、私たち新潟県中学校教育研究会の誇りの表れともいえます。今後も大切にしていきたいと考えます。

さあ、今年度も、2年次研究会が開催されます。この授業情報誌Classを持って、深い学びにいたる授業づくりに参画しましょう。そして、授業で輝く生徒と教師の姿から、多くのことを学び取ってきましょう。

目次

巻頭言 第10号発刊にあたって

創刊から10年を迎える「授業情報誌Class」に思うこと	2
新潟県中学校教育研究会 会長 金山 光宏	

特別寄稿

「中核的な概念」を軸にした深い学びの実現	6
京都大学大学院 准教授 石井 英真	

《令和7年度新潟県中学校教育研究会 研究主題&3つの重点》	14
-------------------------------	----

《指定研究推進都市および2年次研究会 会場校》	18
-------------------------	----

① 指定研究（2年次）の研究推進委員会が提案する 「深い学びにいたる授業」

社会

単元を見通して、「見方・考え方」を働かせながら深い学びにいたる授業づくり	20
県中教研 社会科部 全県部長 小森 一秀	
「3年：地方自治と住民の参加」	22
上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研	
「2年：日本の近代化と国際社会」～明治維新と立憲国家への歩み～	24
中越地区／長岡市・三島郡中教研	
「3年：地方自治と私たち」	26
新潟地区／新潟市中教研	
「3年：地方自治と住民の参加」	28
下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研	

理科

「ああ、そういうことか」、 「私、間違ってたなあ」と、分かり直しができる授業	30
県中教研 理科部 全県部長 大川 正史	
「1年：身のまわりの現象」 ～なぜ反射板はどこから光を当ててもまぶしいのか～	32
上越地区／上越市中教研	
「3年：化学変化とイオン」～酸・アルカリとイオン～	34
中越地区／南魚沼市・南魚沼郡中教研	
「2年：電流・電圧と抵抗」	36
新潟地区／新潟市中教研	
「3年：化学変化とイオン」～塩化銅水溶液の電気分解～	38
下越地区／村上・岩船郡中教研	

英語

英語の授業で深い学びにいたるために、「深い学びの技法」をいかに活用するか …	40
県中教研 英語部 全県部長 荒川 高明	
「3年：PROGRAM 6 The Great Pacific Garbage Patch」 …	42
上越地区／糸魚川市中教研	
「3年：Lesson 5 Translating Culture」 …	44
中越地区／加茂市・南蒲原郡中教研	
「3年：Lesson 5 Translating Culture」 …	46
新潟地区／新潟市中教研	
「3年：Lesson6 Being Fair Project2 30秒CM」 …	48
下越地区／佐渡市中教研	

音楽

感覚的な印象を、より確かなものへ～音楽的根拠に基づいた深い学び～ …	50
県中教研 音楽部 全県部長 藤井 章	
「3年：わたしたちの表現を追求しよう」 …	52
上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研	
「3年：“根拠”を明らかにして鑑賞しよう」 連作交響詩「わが祖国」からブルタバ（モルダウ） …	54
新潟地区／新潟市中教研	

保健体育

豊かなスポーツライフを実現するための深い学びにいたる授業づくり …	56
県中教研 保健体育部 全県部長 北山 智博	
「3年：球技（バレーボール）」 …	58
中越地区／長岡市・三島郡中教研	
「2年：器械運動（マット運動）」 …	60
下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研	

学校保健

自分の心と体を見つめ、仲間と学び合いながら 健康課題の解決を目指す授業づくり …	62
県中教研 学校保健部 全県部長 高橋 妙子	
「3年：自分も相手も大切にコミュニケーションのあり方を考えよう」 …	64
上越地区／上越市中教研	
「2年：自分に合ったよりよい睡眠習慣を見つけよう」 …	66
新潟地区／新潟市中教研	

2 指定研究（1年次）の研究推進委員会の進捗状況

国語 …	68
数学 …	69
道徳 …	70
技術・家庭 …	71
美術 …	72
特別活動 …	72
総合的な学習の時間 …	73

編集後記 新潟県中学校教育研究会 理事長 鈴木 善士 …	74
------------------------------	----

〈特別寄稿〉

「中核的な概念」を軸にした 深い学びの実現



京都大学大学院
准教授 石井 英真

1. 現行学習指導要領の「熟成」—質と公正と実行可能性の同時追求

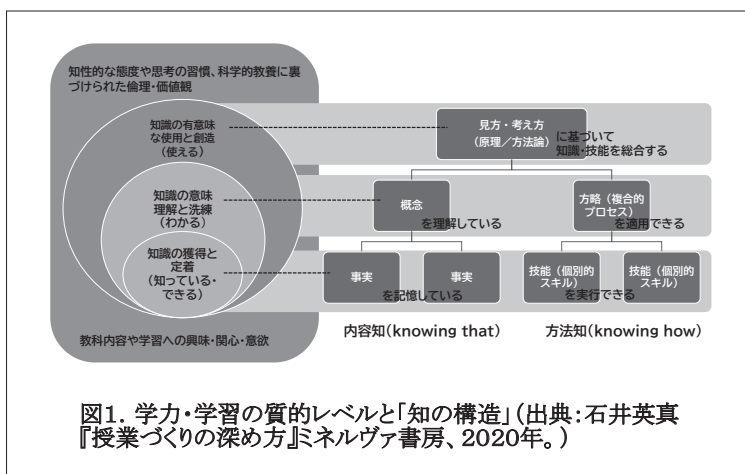
この小論では、次期学習指導要領改訂に向けた議論のポイントを整理しつつ、学習内容の重点化が必要とされる背景を明確化する。そして、重点化を行う際の指針やそれが深い学びの実現にどうつながるのかについて述べてみたい。

2024年9月17日、「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会」の論点整理が出され、12月25日には中教審に諮問がなされ、次期学習指導要領改訂に向けた議論が始まった。次は何がキーワードになるのかといった具合に、新しいトレンドを探る動きもある。そもそも現行学習指導要領が実施されようとするタイミングで、GIGAスクール構想、中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（2021年1月26日、以下令和答申）など、次々と新たな教育改革構想が、文科省のみならず、様々な省庁からも提起されてきた。そして、咀嚼する余裕も十分でないままに新しい言葉が投げ込まれる結果、現行学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」から令和答申の「個別最適な学び」へとキーワードを乗り換えるかのような動きも見られる。しかし、令和答申は現行の学習指導要領を補足するものであって、めざす学びのあり方や育てるべき目標・内容を定めているのは学習指導要領である。主と従をたがえてはならない。

現行の学習指導要領はその方向性や枠組みとしては比較的よくデザインされていて、批判的検討が必要であるにしても、それをがらりと変えるよりも、まずはその趣旨を現場において実装していくこと、いわば改革の「熟成」に力を注ぐことが重要である。ただその際、コロナ禍やGIGAスクール構想を経て顕在化し加速している、学校のそもそものあり方の根本的な問い直しの動きや学校現場の厳しい状況やAIの進歩等、現行学習指導要領改訂期とは異なる社会や教育の現状もあり、その中で現行学習指導要領のエッセンスをつかみ直すことが重要である。すなわち、不登校問題・学校の生きづらさ問題に向き合い、多様性に寛容で応答的な学校を目指す「包摂性」の観点から、そして、教職のブラック化・人口減少がもたらす構造的な人手不足問題に向き合い、脱丸抱えと余裕の創出による「持続可能性」の観点から学校のシステムのあり方を柔軟化しつつ、一方で、デジタル学習基盤という条件整備を武器にしながら、「学びの質」

そのためには、現行学習指導要領の積み残しの課題である「何を教えるか」に切り込み、目標・内容の重点化・構造化に向き合うことが肝となる。「質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方」が諮問の審議事項の一つ目に挙げられていることの意味は大きく、その具体化の議論は「多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方」とも密接に関わっている。すべての子どもたちに（公正）、資質・能力の育成（有意味で深い質の高い学び）を保障していくこと、そのために教育課程の実施に伴う過度な負担が生じにくい仕組みの構築や条件整備にも取り組むこと、いわば質と公正と実行可能性の同時追求が求められる。

目標・内容の重点化・構造化の基本的な方向性を確認しておこう。資質・能力ベースの現行学習指導要領においては、内容項目を浅く広く網羅することよりも、考える力や主体性等を育むべく、内容や主題を主体的に対話的・協働的に学び深めることがめざされていた。いわば「less is more」（少なく深く学ぶことで結果として多くを学べ



資質・能力ベースの背景にある、コンピテンシー・ベースのカリキュラム改革は、知識や内容を軽視して形式的なスキルのみを指導するという形では達成されない。この間の改革の背景には、学習観の転換があるが、その中心的な考え方は、知識は与えられたそのままコピーされるものではなく、学び手によって解釈され構成されるものであるという構成主義の考え方である。物事は意味を考え関連付けて学んだ方が残るし応用も効く。知識と思考とは密接に関連している。人間の有能性は、その分野に固有の構造化された専門知識や文脈に規定されており、

形式的な思考の訓練の効果は限定的である。知識を記憶して次に考える力の育成に進むという機械的な段階論も否定される。大事なものは、知識とその習得の質である。コンピテンシー・ベースで学びの質を追求する上で重要なものは、深めがいのある各教科の本質的で中核的な内容を見極め、それを軸に中心的な内容（深め理解すべきもの）と周辺的な内容（知っておいた方がよいものや、思考の過程で触れる程度でよいもの）とを整理する、目標・内容の重点化・構造化なのである。

学び深めるべき中核的な内容を見極め、幹と枝葉の部分を整理し目標・内容の構造化を進める上で、学力・学習の質の三層構造と知識のタイプ（知の構造）を意識するとよい。まず、ある教科内容に関する学びの深さ（学力・学習の質）は、図の左側のように三つのレベルで捉えることができる。個別の知識・技能の習得状況を問う「知っている・できる」レベルの課題（例：穴埋め問題で「母集団」「標本平均」等の用語を答える）が解けるからといって、概念の意味理解を問う「わかる」レベルの課題（例：「ある食品会社で製造したお菓子の品質」等の調査場面が示され、全数調査と標本調査のどちらが適当かを判断し、その理由を答える）が解けるとは限らない。さらに、「わかる」レベルの課題が解けるからといって、「真正の学び」の中で知識・技能の総合的な活用力を問う「使える」レベルの課題（例：広島市の軽自動車台数を推定する調査計画を立てる）が解けるとは限らない。なお、「使える」レベルの円の中に「わかる」レベルや「知っている・できる」レベルの円も包摂されているという図の位置関係は、知識を使う活動を通して、知識の意味の学び直しや定着（機能的習熟）も促されることを示唆している。

さらに、図の右側の「知の構造」が示しているように、知識は、大きくは年号や法則などの内容知と、器具の使い方や作文の仕方などの方法知に分けられる。そして、内容知、方法知それぞれについて、上述の学力・学習の質の三層構造に対応する形で、特殊の要素的な知識からより一般的で概括的な知識に至る階層構造で捉えることができる。歴史上の個別の人名や出来事（事実）は、歴史の流れや法則性（概念）をつかむパーツとして位置付けられる。計器の読み方（個別的技能）は、実験（複合的なプロセス・方略）する中で生かされる。

単元や毎時間の授業で学び深めるべきメインターゲットを絞る上で、内容知については、事実的知識よりもそれを要素として包含し構造化する概念的知識に、方法知については、個別的な技能（機械的な作業）よりそれらを戦略的に組み合わせる複合的なプロセス・方略（思考を伴う実践）に焦点を合わせることが有効である。このように、より一般的な知識に注目してこそ、授業での活動や討論において、要素を関連付け深く思考する必然性も生まれるのである。いくら各教科において、多面的・多角的な思考などが明確にされそれを伸ばそうとしても、思考の対象となる内容が、個別の断片的なトピックに止まるなら、思考する必然性は生まれず、思考は形式化する。

3. 「中核的な概念」を生かすということ

単元という単位で資質・能力を育てていくという時、「明治維新」、さらには富国強兵・殖産興業政策といったより個別的な内容項目について、規則性を見いだしたり、多面的・多角的に

考察したりしがちである。これに対して、問いと答えの間が長く、その過程でより複合的な思考力や社会的・情動的スキル等を育んでいくような活動を創る上で、ビッグ・アイデアと言われる、より統合的でメタな概念を軸に考えていく方向性が考えられる。体育で「ゴール型」というカテゴリーは必ず扱うにしても、サッカーやバスケットボール等の個別の種目の網羅性については柔軟性を持たせられる。一般性が高く大きく括れるゴールだからこそ、いろいろなルートでゴールに迫れるし、ローカライズの余地も大きくなるというわけである。同様に、「日本の近代化」という大きな概念の下で、「殖産興業」「文明開化」などを統合的に扱い、どれか一つの下位項目を子どもが選んで分担して深め、全体で知識内容を共有したり、それらに共通する点などを議論したりして「日本の近代化」の構造的な理解を促すことも考えられる。さらに、「近代化」というよりメタな目標・内容や「近代化とは何か」というメタで包括的な本質的な問いを意識することで、西欧と日本の近代化を比較するような、よりダイナミックな単元展開も考えられるだろう。そうして、教科書の複数の章（単元）をめくり直しながら、大きな問いや課題の下で、その追究のためのパーツとして、断片的、個別的な知識・技能を吸い上げ、それらを結集させることで問題解決や自分なりの議論の構築につなげていくわけである。

概念やビッグ・アイデアとは本の「目次」のようなものである。それ自体を教えても全体や意味を理解できるわけではなく、それを補助線にして本文を読んで肉付けすることが不可欠である。個別のトピックや出来事を具体例のように扱い、「要は同じことだ」と共通性に気づき、一般化していくことで概念の意味は理解される。また、その肉付けの仕方によって、理解の程度に厚み（深さの程度の違い）が、そして、ゴールへの到達性に幅（アプローチの多様性）が生まれる。「登る山は一緒でも登り方は色々」という発想でゴールテープを広く取り、多様な子どもへの包摂性を高めることにつなげる視点が重要である。

たとえば、算数・数学科については、「中核的な概念」という言葉は使っていないが、それに相当するものを軸に比較的教育課程は構造化されている。算数・数学科の「中核的な概念」は、学年を越えて繰り返し挙げられる、各領域の柱となる目標・内容、すなわち、「単位の考え」や「関数的な考え」といった、「数学の内容に関係した数学的な考え方」におおよそ対応する。学習指導要領解説では、「数学的な見方・考え方」を軸にした内容の概観の表において、教科の本質や内容の螺旋構造が捉えやすくなっている。解説を見なくても、むしろ学習指導要領本体が、系統表のような形で整理され、各領域のビッグ・アイデアに関する育ちの螺旋構造が見えやすくなるとよいだろう。

また、学力や思考の質をより問いと答えの間の長いものにしていくには、想定する知識内容自体の問い直しが必要となる。たとえば、「伴って変わる二つの数量を見いだして、それらの関係に着目し、表や式を用いて変化や対応の特徴を考察すること」（思考・判断・表現）についても、「比例」といった概念よりも「関数」といったさらにメタで統合的な概念を意識することで、「比例」に関する「適用（application）」問題（特定の解法を適用すればうまく解決できる「わかる」レベルの課題）を超えて、場合によっては変域のあるグラフや一次関数的な解法も見いだしながら、現実世界の問題をモデル化して未来予測につなげるような、「総合（synthesis）」問題（これを

使えばうまくいくという明確な解法のない課題に対して、手持ちの知識・技能を総動員して取り組まねばならない「使える」レベルの課題）を設計しやすくなるだろう。「何を学ぶか」で想定する目標・内容の質がメタに上がることで、それに対して発揮される思考の質も問いと答えの間の長いものになっていく。

4. 今こそ求められる真の知性と言葉の力

「中核的な概念・方略」を軸にした目標・内容の重点化・構造化については、教科の知識や内容を薄めるコンテンツフリー化の方向ではなく、ここまで述べてきたように、むしろ教科観の問い直しを含んで、内容論の重要性を再確認するものとして捉える必要がある。生成系AIの登場により、知識の習得やレポート等を書く活動が意味をなさなくなるという意見も耳にする。しかし、情報は得られても価値ある知識を学ぶ機会は希少化されつつあるように思われるし、むしろ大事になるのは、物事の真偽やよしあしを判断するために必要な、各領域の専門的な概念的知識、それも深く学ばれ感性や直観的判断と結びついたそれであり、分かった気にならず納得を求め掘り下げようとする姿勢や、知性に裏付けられた批判的な吟味力（メディア・リテラシー）である。

知識（データ）爆発の状況下で、しかも、必要な知識・情報はネット上で誰もがアクセスできるといった状況だからこそ、知識の習得を軽視するのではなく、むしろより普遍性をもった骨太の知識（文化・教養）を学ぶことの意味にも目を向けていく必要がある。大量の情報（その多くは自分の求める範囲や思考の枠内に収まるもの）に埋もれず価値ある情報を選び出し、自分の視野の範囲を超えた知や情報との出会いを生み出すために、また、活動的で協働的な学びを通して深める価値のある内容を絞り込むためにも、専門家コミュニティでの議論と検証を経た、あるいは論争過程の、世界認識の枠組みの核となりうる内容（議論の厚みのある知識）を軸に、カリキュラムを精選・構造化していくことが必要だろう。

また、生成系AIの登場により、もっともらしい情報が爆発的に増え、真実が何かを見極めることが難しくなり、真偽よりも好きか嫌いかといった感情に従って情報が垂れ流され拡散される「情動社会」といった状況が生まれている。それは民主主義を危うくするものであり、あいまいな状況と向き合いつつ情報を吟味していく思考力（ネガティブ・リテラシー）が重要となる。そして、そもそも機械に解くべき課題を具体的に投げかける上では、適切なプロンプトの作成等、問題を切り分け相手に分かるように伝えられる論理的な言葉の力も不可欠である。AIをパートナーに問題を解決したりアイデアを形にしたりする基礎経験と使いこなすためのリテラシーの上に、腹落ちする言葉など経験と結びついた言葉の力、あるいは体験や経験に根差した知識、そして知性に裏付けられた感性（知覚）が人間としての付加価値を構成するだろう。

コストカットや社会効率を優先するあまり、AIに代替可能な形で人間という存在や仕事や教育のあり方自体をモノ化・操作化・貧相化したり、言語能力を情報処理能力の枠内で理解したりする方向性ではなく、AIを鏡として人間らしさを問い直し、人間性の新しい価値の発見に向かうことが必要である。デジタル化が進んだ子どもたちの言語活動や言語生活において、「読む」

ことは、一文字一文字を丁寧に追うことなく、画像的にざっくりと「文字列を眺める」といことに、「書く」ことは、自分で文字を象り綴ることなく、「打ち込む」さらには「コピペする」ことに、そして、「話す聞く」ことは、相手意識や相互理解への志向性を伴った肉声の対話というより、モノローグ的に発信して、感情的に反応（「いいね」か否定かブロック）することになっているかもしれない。「読み深める」、「綴る」、「語り合い、聞き届ける」といった動詞を経験し、読むとは、書くとは、話すとは、聞くとはどういうことなのか、言葉の経験をアンラーンすることこそが、学校での言葉の学びで大事になるだろう。

5. 使うことで教師が育つ学習指導要領へ

こうして中核的な概念・方略が何かを明確化し、それを共通のコアとしつつ、単元間、学年間で目標・内容がどうレベルアップしていて指導の重点がどこにあるのかといった、タテの系統性が見えるようにしてこそ、内容の軽重をつけつつ、単元で、単元を超えて学びを深めていくこともできる。分かりやすい学習指導要領とはそうした教科の本質や内容の系統を表形式で視覚的に把握しやすくするということである。「〇〇な学び」が次々示され、「そのプロセスを一時間の授業に盛り込まなければならない」という意識、型をなぞりこなすという傾向が強まり、教師が自分たちで授業をつくっているというオーナーシップ感覚をもてないでいるように思われる。そして近年、指導案において、指導観のウェイトが肥大化し、教材観（内容理解）と子ども観（子ども理解）が消失あるいは形骸化してはいないだろうか。学習指導要領を、一時間よりも単元で授業を創るのに使いやすくすることで、さらには、デジタル学習基盤を生かして、子ども向けの言葉に変換できるようにしたりと、子ども達にとっても学びの地図として使えるようにすることで、目標・内容の構造表に教師が日々触れることになり、関連する内容解説にもすぐに飛べるようにしたりして、教師の側の教科内容理解をじわじわと高め、教科書網羅主義からの脱却につながるようにしていけるとよいだろう。何度も見返すことの促しがポイントである。

まずは、教科書を教える、あるいは教科書をただなぞる授業を超えて、教科書で教える、さらには教科書を資料にして学ぶ授業が創れるようにしていく。この授業づくりの基本を改めて確認することが必要である。ちなみに、子どもの学びを捉える際、手元に注目することが有効だが、同様に、いま教師達は仕事や学びにおいて、たとえば、授業準備において、何を手元に広げているだろうか。授業を工夫するときに何を参照しているのだろうか。最近では、SNS上のちょっとした発信を参照することも増えているだろう。ただ、それは、すぐにちょっと役立つようなティップスのようなものに偏りがちである。また、朱書きの指導書は見ても、子どもたちが使う教科書そのものをちゃんと読まない（それゆえ子ども目線で教科書から授業を構想できない）、ましてや学習指導要領本体を見ることもない（それゆえ教科書を通して学ばせたい目標・内容への理解が積み上がらない）。むしろ、各自治体の標準指導プラン（スタンダード）的なものから授業準備を始め、時にそれを分解して自分なりの授業を創るような機会もなく、ただそれをこなすことになっていないだろうか。教材研究どころではないという状況は確かに

あるが、日々授業はしている。同じように労力をかけるのなら、労力のかけ方が大事で、そのときに、子ども理解と教材理解・内容理解を深められるように学習指導要領の示し方等のしかけや環境・条件整備が重要である。

専門性の高いすぐれた教師は、目標・内容をメタに意識しているものである。五角形の内角の和を求める活動を行って、「五角形の内角の和の求め方」を学んだ授業としてまとめるのではなく、「多角形の内角の和の求め方」を学んだ授業としてまとめる。さらに、よりメタに、「既習事項に落とし込めれば問題は解決できる」といった数学的な問題解決の考え方を学んだ授業としてまとめるという具合である。「中核的な概念・方略」を軸に内容を構造化することは、そうしたすぐれた教師の目標・内容理解をすべての教師のものにしていく試みでもある。

柔軟な教育課程の促進に関わって、授業時間を5分短くし、短縮分の余剰時間（「調整授業時数」）を、別の教科等の授業時数に上乘せしたり、必要な教科の開設に充てたりするのみならず、「裁量的な時間」という言葉で、「個別最適な時間」とでも表現できるような、子どもたちの個性、特性や実態に応じた学習支援等への使用、さらには授業改善に向けた教員研修や学校の研究活動等に充てられる可能性も議論されている。「裁量的な時間」が、各学校での時間いじり、教育課程いじり（研究開発学校での新教科・領域創設等の「大文字のカリキュラム開発」ではない「小文字のカリキュラム開発」）のきっかけとなり、現場の裁量やオーナーシップの拡大につながることを期待される。ただし、短い時間でせわしなくこなしたり、先取り学習に傾斜したりすることがないように、授業で深める「指導内容」と、あとは自由度を高めて子ども達に任せつつゆるやかに見守る「学習内容」との軽重の付け方の指針が必要だし、単元というスパンで授業と学びをデザインする視点が重要である。午前中の授業が興味・関心を広げもっと学びたい、やってみたいということを触発してこそ、午後からの子どもに委ねる時間も充実するのである。また、日常的なカリキュラム・メーカーとして、教師が内容面の専門性を蓄積していける仕組みや余裕や条件を整え支援していくことも大切である。九九も五の段までやれば六の段以降は子どもたちが自分で作っていけるように、ここさえ押さえておけば後も同様にできるといった一般化が促されやすくなることで、結果として時間的な余裕も生まれるだろう。

6. 学び深めるとはということか

授業とは、教師と子ども、子ども同士の一般的なコミュニケーションではなく、材（教材、題材、主題、学習材）を介した教師と子どもや子どもたち同士のコミュニケーションである。子ども主体か教師主導かの二項対立の議論は、この授業という営みの本質的特徴を見落としている。授業という営みの本質的特徴をふまえるなら、子どもたちがまなざしを共有しつつ材と深く対話し、教科の世界に没入していく学び（その瞬間自ずと教師は子どもたちの視野や意識から消えたような、教師など眼中にないような状態になっている）が実現できているかを第一に吟味すべきである。

どれだけ「〇〇な学び」が示されても、授業においては、いかに子どもたちを材と出会わせて、没入させて、さらにその先にもっと欲しい、学びたいと思わせるかが勝負である。二項で考え

るから、教師が手放すと子どもがどこに行くか不安で子どもに委ねられない。しかし、材の存在を想定すると、材に食いつかせれば、材（対象世界）が子どもをある程度導いてくれるので、子どもに委ねやすくなるだろう。教材研究等、教科学習としての質を追求することとアクティブ・ラーニングは対立的に捉えられがちだが、教科本来の魅力の追求の先に結果としてアクティブになるのである。

教師主導でも学習者主体でも、子どもを引き込み、学びや成長を保障する授業は、材を介して教師と子ども、子ども同士が向かい合い、ともに材に挑む「共同注視」、いわばカウンター横並び関係になっているものである。親子で本を囲んでともに読み合う読み聞かせの時の関係性を思い浮かべるとよいだろう。教師の仕事は、その教科のうまみを得られる材を、できるだけ本物のナマのそれを考え抜き（教材研究）、材と子どもたちとのいい出会いを組織し（導入）、子どもとともに横並びで材と対話し、時にはナナメの関係に立ちながら、子どもたちの思考の隙（例：「そんなこと考えたことがなかったけど、言われてみればどうなるんだろう、気になる…」）とあってしまうポイント）を突きながら、その材のうまみを感じられる入口をさりげなく指さし続けることである（発問とゆさぶりによる展開の組織化）。さらに、「もう終わり？」「まだやめたくない」「じゃあ〇〇はどうなっているのかな」「これって授業で習ったことと関係あるんじゃないか」と、授業の先に子どもたちが、もっと学びたいと思い、授業外、学校外の生活で引っかかりを覚え、立ち止まり、学びや追究を始めたり、自分と同じ興味や問題を追究している学校外のホンモノを伴走者として学び始めたりして、生活場面や生きることを豊かにしていくような、そんな子どもたちの姿を願い目指し続けることが重要である（学びへの導入としての授業）。「深く学ぶ」とは、「考え抜く」ことである。他者とともに深みのある材と向き合い、ともに対話し学び合うという条件があることで、思考は対象を失わず、関係の支えの下で、一人では至れない材の価値が発見される。それがさらなる思考を触発し没入へと誘うことで、問いと答えの間は長くなっていくのである。

【引用・参考文献】

- ・石井英真『再増補版・現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2020年。
- ・石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房、2020年。
- ・石井英真『中学校・高等学校 授業が変わる学習評価深化論』図書文化、2023年。
- ・石井英真『教育「変革」の時代の羅針盤』教育出版、2024年。

令和7年度

新潟県中学校教育研究会 研究主題&3つの重点

研究主題

深い学びにいたる授業

～「深い学びの技法」を基に構成する
学習過程に着目して～



重点1 生徒の学び

「深い学びの技法」を基に、
学習過程の充実を図り、
生徒の資質・能力を育成します！

深い学びにいたるために、
「深い学びの技法」と学習過程
の充実を図ります。「深い学び
の技法」は、「設定」「思考・
解決・表現」「評価」の3つの
学習過程に応じて設定されてい
ます。教師は、生徒が「深い学
びの技法」を用いて、学習過程
を深めながら、資質・能力を活
用・発揮できるように手立てを
講じます。

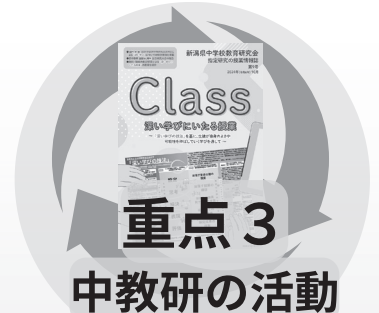


重点2 教師の学び

ファシリテーションを取り
入れた会員の「深い学び合い」
を推進します！

ファシリテーションを取り
入れた授業検討会、研究協議
会などを通して、「深い学び
合い」を活性化していくこと
を目指します。

研究推進委員会の委員構成
の工夫や、研修体制サポート
の充実を図ります。



重点3 中教研の活動

持続可能な研究活動の
在り方を目指した改善
を図ります！

令和9年度から指定研究
推進事業の内容の精選を図
り、持続可能な研究活動の
在り方を検討していきま
す。また、県中教研の事業
などについても、教育動向
に合わせて、柔軟に検討し
ていきます。

新潟県中学校教育研究会 事務局

〒950-0088新潟市中央区万代1-3-30 万代シティホテルビル3階

TEL・FAX：025-290-2251

E-mail：ken-ckk@niigata-inet.or.jp

HP：https://niigata-chukyoken.jp



重点1

生徒の学び



「深い学びの技法」を基に、
学習過程の充実を図り、
生徒の資質・能力を育成します！

「深い学びの技法」を基に、学習過程の充実を図る

①「深い学び」とは？

「深い学び」とは、生徒が学習内容を追究する中で、既習の知識や技能を基に新たな知識や技能を関連付け、精緻化するなど、思考や認識が高度化している様相をいいます。

②「深い学び」に向かうためには？

県中教研では、昨年度から「深い学びの技法」を取り入れました。生徒は追究の中で、「深い学びの技法」を用いながら思考や認識を高度化していきます。そのため、教師はそれが可能となる学習過程を構想します。

③ 単元・題材や授業をどのように組み立てますか？

「深い学びの技法」は生徒の「学び方」であるとともに、教師の「手立て」でもあります。下の図のように、学習過程に応じた手立てを講じることで、生徒は学習内容を獲得しながら資質・能力を存分に活用・発揮していきます。

その結果、生徒は、学習内容をより深く理解することになり、資質・能力を異なる状況でも活用できるようになります。資質・能力が確かなものとなるのです。

次の3つの学習過程に応じて、手立てとなる「技法」が下表のように整理できます。

- ①学習対象に対する目的や課題、見通しをもつ「設定」の過程
- ②課題解決を図る「思考・解決・表現」の過程
- ③学んだことを俯瞰したり、振り返ったりする「評価」の過程



「深い学びの技法」を手立てとして講じる

過程 「深い学びの20の技法」

- | 設定 | 思考 | 解決 | 表現 | 評価 |
|----------------------------|--------------------------|-----------------------|--------------------------|--------------------------|
| ①学んだ知識を活用して課題や目標を設定する | ⑤資料やデータに基づいて考察したり検証したりする | ⑪原因や因果関係、関連性を探る | ⑮自分の言葉で学んだことを整理しまとめる | ⑰既製の資料や作品を批判的に吟味検討する |
| ②知識やデータに基づいて仮説の設定や検証をする | ⑥複数の資料や観察結果の比較から結論を導く | ⑫学んだ知識・技能を活用して事例研究をする | ⑯要素的な知識や知見を構造化・モデル化する | ⑱身に付けた資質・能力をメタ認知し成長につなげる |
| ③視点・観点・論点を設定して思考や表現をする | ⑦視点の転換や逆思考をして考える | ⑬理由や根拠を示して論理的に説明する | ⑰既製の資料や作品を批判的に吟味検討する | ⑲学習成果と自己との関わりを振り返る |
| ④R-PDCAサイクルを設定して活動や作品を改善する | ⑧異なる多様な考えを比較して考える | ⑭学習モデルを活用して思考や表現をする | ⑱身に付けた資質・能力をメタ認知し成長につなげる | ⑳学んだことを生かして、次の新しい課題を作る |

参考・引用

- 田中 博之 (2023)。「中学校における深い学びの在り方とこれからの授業改善の方向」『新潟県中学校教育研究会 授業情報誌Class』8号, pp.6-12.
- 田村 学 (2024)。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた『個別最適な学びと協働的な学び』の充実」『新潟県中学校教育研究会 授業情報誌Class』9号, pp.6-13.

重点2



教師の学び

ファシリテーションを取り入れた会員の「深い学び合い」を推進します！

ファシリテーションを基に、学び合いの促進を図る

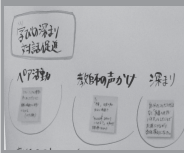
① ファシリテーションを取り入れる理由は？

県中教研の指定研究推進事業では、毎年1年次・2年次で合わせて約38の指定研究推進委員会が立ち上がります。各郡市で研究授業、研究会を実施し、協議会などでファシリテーション（話し合いを促進する技法）を取り入れ、会員が積極的に学び合っています。

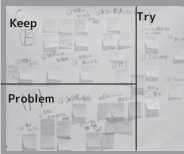
右記のように、ファシリテーションを協議会などの目的に応じて取り入れることで、参加者のインプットとアウトプットの量や質が高まり、理解や表現が促進されます。参加者が自分事として、研修や授業を考えることができます。

ファシリテーションの具体例

KJ法



マトリックス法（主にKPT法）



指導案拡大法



よさ

参観者が授業で気付いた共通のものをまとめることで、参観者同士で新たな視点や考え方を共有できます。

協議題に応じて、観点別のフレームを設定し、参観者の気付きを共有します。さらに、授業の改善方法も共有できます。

授業展開に沿って、教師の働きかけ、生徒の思考や行動にどのように影響したかを分析できます。また、授業者の教授行動など細かい点も分析できます。

方法

①参観者が付箋に気付きをまとめます
②グループで付箋を出し合い、共通するものをまとめ、グルーピング、ラベリングします。
③②について新たな視点や考え方を共有します。

①協議題に沿って、観点別のフレームを設定します。
（例）Keep（有効だった手立て）、Problem（改善すべき手立て）、Try（改善方法や代案）
②それぞれのフレームごとに、参観者の気付きを共有し、考えを深めます。

①本時の指導案を拡大機で複写します。
②参観者は、授業で「教師の働きかけ」「生徒の反応」に関して、それぞれ気付いたことを付箋にまとめます。
③指導案の流れに沿って、参観者の気付きを共有します。

② ファシリテーションにより生まれる 深い学び合い

研究推進委員会で、ファシリテーションを取り入れ、各教科・領域で「深い学びにいたる生徒の姿」とそれに迫るための「深い学びの技法」や「学習過程」を構想します。

そして、お互いに授業実践を共有し、2年次の研究会で成果を発表します。研究会の授業協議会で得た新たな学びを、自校で実践することで、会員が学び合い、高め合う「深い学び合い」が活性化します。

県中教研が伝統的に築き上げてきた「深い学び合い」の方法を活用し、学び合いを活性化させましょう。

教師の深い学び合い

目指す生徒の姿の設定



目指す授業の構想



研究推進委員同士による実践



研究会での成果発表



研究成果の共有



重点3



中教研の活動

持続可能な研究活動の
在り方を目指した改善
を図ります！

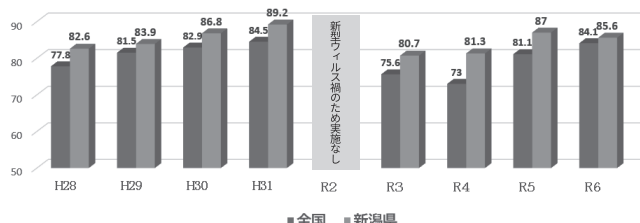
持続可能な研究活動の在り方の改善を図る

① 県中教研の強みは何か？

全国学力・学習状況調査 学校質問用紙

教員研修に関する質問項目の回答数値の比較について（全国と新潟県）

- ・「教員は、校外の教員同士の授業研究の場に定期的・継続的に参加していますか」（H28～H30）
- ・「教員は、校外の教科教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加していますか」（H31～R3）
- ・「個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加していますか」（オンラインでの研修参加を含む）（R4～R6）



県中教研の会員は、各地区、各都市の中教研の活動を通して、日々、会員で学び合える環境があります。さらに他の地区、都市の研究を授業情報誌Classを通して学べたり、各地区の指定研究会を参観したりできる環境にあります。この点は他県にない教育研究会としての強みです。

県中教研の取り組みが、県内の中学校教員の「研修参加の意欲」に長年大きな影響を与えてきました。左は、県内の平成28年度から令和6年度の全国学力・学習状況調査の学校質問紙の「教員の研修参加の意欲」に関する数値の結果です。この約10年間、新潟県の中学校では、全国平均以上の数値を維持しています。それだけ、会員の「研修参加の意欲」は高く、お互いに学ぶ風土が確かに醸成されています。

② 今後、持続可能な研究活動 のために、何を改善するか？

指定研究の在り方改善プロジェクト

当会は「本県中学校教育の研究活動を推進し、その振興発展を図ること」を目的に、会員の資質・能力の向上を支援してきました。しかしながら、昨今の教育の課題に対応するために、当会でも研究活動の持続可能性が問われています。

令和6年度、会長から「これからの県中教研の指定研究の在り方について」諮問されたことを受け、県中教研の評議員会に、「指定研究の在り方改善プロジェクト委員会」を設置し、今後の指定研究の在り方を中心に議論を進めてきました。

委員会が答申を作成し、理事会、評議員会での審議を経て、右記のように計画や内容がまとまりました。

令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度
令和7・8年度指定研究 →移行期間－新支援制度の導入可能		令和8・9年度指定研究 →移行期間－新支援制度の導入可能	
		※移行期間に、新支援制度のヒアリングを実施し、大綱を作成する（各地区都市中教研会長会、各地区校長会、指定研究関係者）。	
		令和9・10年度指定研究	
		①指定研究の部会の変更 生徒指導と進路部会がなくなり、15部会から13部会に。	
		②指定研究の地区ローテーションの変更 全ての教科・領域が4年に1度の指定研究に。	
		③支援制度の拡大（任意で活用可能） 同じ地区内の都市や隣接する他地区の都市から研究推進の委員委嘱が可能に。	

プロジェクトの導入により期待できること

- ・全ての教科・領域で4年に1度のローテーションになることで、各地区内の都市の指定研究がゆとりある計画・実施ができます。
- ・指定研究1・2年次での研究推進委員会の総数が変わります。
 - 令和8年度まで毎年の総数＝約38委員会
 - 令和9年度から改善が始まり、令和10年度からの総数＝約26委員会
- ・近隣の都市や地区・ブロックで研究推進委員を委嘱する制度を活用することができます（令和7・8年度に先行実施可能）。

指定研究推進郡市および2年次研究会 会場校

◇ 令和6・7年度指定 (上段：指定研究推進郡市、下段：令和7年度研究会 会場校)

	上 越	中 越	新 潟	下 越
社 会	柏崎・刈羽 (柏崎市立松浜中学校) 11月18日(火)	長岡・三島 (長岡市立栖吉中学校) 11月27日(木)	新潟 (新潟市立新津第五中学校) 11月6日(木)	五泉・東蒲 (阿賀町立三川中学校) 10月29日(水)
理 科	上越 (上越市立城東中学校) 11月11日(火)	南魚沼・南魚 (南魚沼市立六日町中学校) 11月20日(木)	新潟 (新潟市立下山中学校) 11月6日(木)	村上・岩船 (村上市立山北中学校) 10月10日(金)
英 語	糸魚川 (糸魚川市立能生中学校) 11月11日(火)	加茂・南蒲 (田上町立田上中学校) 11月26日(水)	新潟 (新潟市立亀田西中学校) 11月6日(木)	佐渡 (佐渡市立相川中学校) 11月14日(金)
音 楽	柏崎・刈羽 (柏崎市立北条中学校) 11月28日(金)	—	新潟 (新潟市立新津第一中学校) 11月6日(木)	—
保健体育	—	長岡・三島 (長岡市立秋葉中学校) 10月22日(水)	—	阿賀野・胎内・北蒲 (聖籠町立聖籠中学校) 11月20日(木)
学校保健	上越 (上越市立吉川中学校) 11月19日(水)	—	新潟 (新潟市立東石山中学校) 11月13日(木)	—

◇ 令和7・8年度指定 (上段：指定研究推進郡市、下段：令和8年度研究会 会場校)

	上 越	中 越	新 潟	下 越
国 語	妙高 (妙高市立妙高高原中学校)	燕・西蒲 (燕市立燕中学校)	新潟 (新潟市立内野中学校)	五泉・東蒲 (五泉市立川東中学校)
数 学	柏崎・刈羽 (刈羽村立刈羽中学校)	十日町・中魚 (十日町市立中条中学校)	新潟 (新潟市立木戸中学校)	村上・岩船 (村上市立岩船中学校)
道 徳	上越 (上越市立名立中学校)	長岡・三島 (長岡市立北辰中学校)	新潟 (新潟市立小須戸中学校)	佐渡 (佐渡市立南佐渡中学校)
美 術	—	三条 (三条市立大崎学園)	—	新発田 (新発田市立猿橋中学校)
技術・家庭	上越 (上越市立城西中学校)	—	新潟 (技術:新潟市立早通中学校) (家庭:新潟市立光晴中学校)	—
特別活動	上越 (上越市立潮陵中学校)	—	新潟 (新潟市立葛塚中学校)	—
総 合	—	長岡・三島 (長岡市立寺泊中学校)	—	阿賀野・胎内・北蒲 (胎内市立築地中学校)

1

指定研究（2年次） 研究推進委員会が提案する 「深い学びにいたる授業」

今年度、研究会を実施する教科・領域の全県部長による解説と、各地区の研究推進委員会が提案する「深い学びにいたる授業」を紹介します。



社会 pp.20-29

理科 pp.30-39

英語 pp.40-49

音楽 pp.50-55

保健体育 pp.56-61

学校保健 pp.62-67

・全県部長による解説

各研究推進委員会の取組を踏まえて、「深い学びにいたる授業」に必要な視点を解説しています。

・各研究推進委員会の実践の紹介

- 「目指す深い学びの姿」の紹介
- 「主な手立て」である「学習過程」と「深い学びの技法」の紹介
- 「単元（題材）の様子」の紹介

2

指定研究（1年次） 研究推進委員会の進捗状況

今年度、指定研究がスタートした研究推進委員会について、進捗状況をお知らせします。



国語 p.68

数学 p.69

道徳 p.70

技術・家庭 p.71

美術 p.72

特別活動 p.72

総合的な学習の時間 p.73

・全県部長による重点の紹介

・各研究推進委員会の活動の様子の紹介

社会

単元を見通して、「見方・考え方」を働かせながら深い学びにいたる授業づくり

社会科では、資質・能力の育成を目指して、深い学びの実現に向けて授業改善を行ってきました。

深い学びの鍵となるのが「見方・考え方」です。この「見方・考え方」を習得・活用・探究という学びの過程で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要です。ここでは、単元を見通して、「見方・考え方」を働かせながら深い学びにいたる授業づくりの取組について紹介します。



県中教研 社会科部 全県部長
魚沼市立広神中学校

校長 小森 一秀

単元のまとまりで「見方・考え方」を働かせる授業を構想する

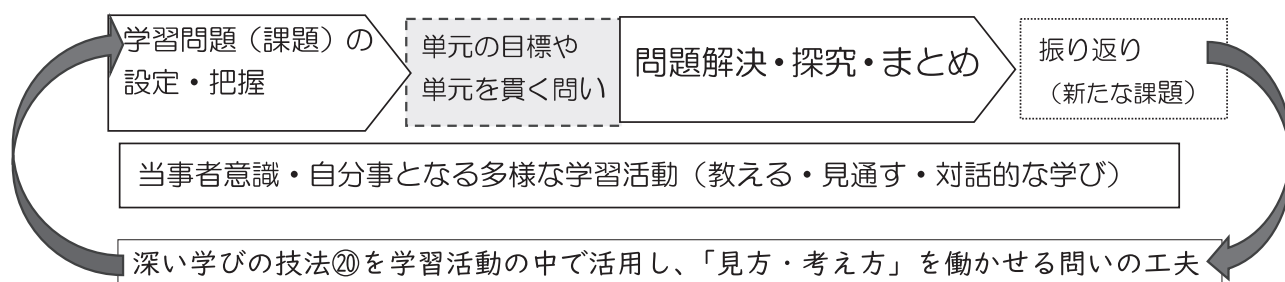
1回1回の授業で全ての学びが実現するものではなく、単元や題材などの内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこで設定するか、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていく。その際、単元目標や単元を通した学習課題を設定し、学習課題とまとめの整合性を図りながら単元構想することがポイントになる。単元を通して「生徒は何ができるようになるか」というゴールをしっかりと見定め、そのゴールに到達するために、生徒にどのように学ばせるのか、

ねらいを明確にした学習活動を設定する必要がある。

そのため、単元のまとまりの中で、多様な学習活動を設定し、学びの技法を学習活動の中で活用することで、「見方・考え方」を働かせる授業を構想する。

また、見方・考え方の「見方」とは視点であり、「考え方」とは思考である。「見方・考え方」は、子どもが身に付けている知識・技能と思考力・判断力等をつなぐ働きがある。子どもが「見方・考え方」を働かせるためには「問い」が必要不可欠である。

単元のまとまり（授業構想）のイメージ



社会的な「見方・考え方」を支える問いの構成の工夫

次に問いの構成の工夫について述べていく。学びの深まりは、「見方・考え方」を働かせることを通して、より質の高い学びにつながる。そのために問いの構成を工夫し、問いの質を高めていく。すると生徒は当事者意識を高め、事象を自分事に引き付けて、調べたことや仲間との対話を通して、関連付けた知識を獲得していくことができる。

- ① 「いつの出来事」「どこの位置」など社会的事象を見い出すための問いにより、事実に基づく知識を獲得する。単元の初めの段階で基礎的な知識・理解を獲得するために有効である。
- ② 「なぜ」、「どのように、どのような」という問いには、社会的事象の関係や特色について多面的・多角的に考察させる問いで、考察した結果として概念的な知

識を獲得できる。グループで課題を追究する際に有効である。

- ③ 「なぜそのような判断をしたのか」「どのような地域にするべきか」という問いは、社会の在り方や自分自身のかかわり方を構想（選択・判断）するための問いであり、社会に見られる課題について構想するための問いとなる。生徒が主体的に社会に参画しようと意識を高める際に有効な問いであり、当事者意識 自分事に引き寄せるために有効な問いとなる。

このように単元を見通して、目的に応じて「問い」の構成を工夫し、「見方・考え方」を働かせて、課題を追究する過程を通して、「深い学び」の実現につなげることができる。

「見方・考え方」を働かせて深い学びにいたる各地区のポイント !!

- 構造化された問いと自らの価値判断の場面を取り入れた単元構成で深い学びにいたる授業。
- 問題意識をもって課題の追究・課題の解決を図っていく学習をデザインする授業。
- 生徒が「見方・考え方」を働かせて思考や判断することで、課題解決力を高め、社会形成に参加する態度を獲得する授業。
- 単元を通して獲得した知識を活用して多面的・多角的に考察することで、将来の住民としてどのような行動が必要か考える授業。

社会 重点方針

自ら考え自ら学び、確かな学力を育てる社会科の学習指導に努める。

- 生徒の学ぶ意欲を高めるために、主体的な学習を促す魅力ある「教材開発」や「単元構成の工夫」を行う。
- 学び合い深め合う学習を実現するために、適切な課題を設けて行う学習の充実を図り、小集団学習や話し合い活動を取り入れた「学習過程の改善」を行う。
- 資料を選択し活用して、自分の考えを記述・発表する力を育てる。

〈参考文献〉

- 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説」文部科学省2017年
- 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説」文部科学省2017年

社会 <上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研>

11月18日(火) 研究会開催

研究主題：当事者意識のある深い学びを実現させる授業の工夫

～他者と協働し、粘り強く最適解を

探究する課題解決を通して～

単元名：「3年：地方自治と住民の参加」

会場校：柏崎市立松浜中学校

公開：1学級

授業者：伊佐 勝

指導者：刈羽村立刈羽中学校 校長 後藤 純二 様
柏崎市教育委員会 指導主事 近藤 多計夫 様



研究推進責任者
柏崎市立第五中学校
石塚 貴希



教科・領域担当者
柏崎市立松浜中学校
伊佐 勝

こんな深い学びの姿を目指します

学習指導要領が示す「よりよい社会の実現に向けて、課題を主体的に解決しようとする態度の育成」に着目し、問題意識をもって課題の追究・解決を図っていく学習をデザインします。

単元構成を工夫しながら、現実社会の課題をどのように解決していくか、自分事として課題に向き合い、その解決に向けて考え抜く姿を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

追究・解決したくなるような課題を、単元全体の学習課題として設定する。

生徒は自分とのつながりや関わりを感じ、問題意識をもって主体的に学習していきます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.5・8）

様々な意見に触れるとともに、「社会的な見方・考え方」を働かせて、議論の内容の吟味・検討を行う。

生徒は多様な意見にふれることで思考を広げていきます。さらに視点を示すことで、焦点化した学び合いができます。

ポイント3（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

学んだ知識や学び合いを生かし、思考の深化・変容を図る。

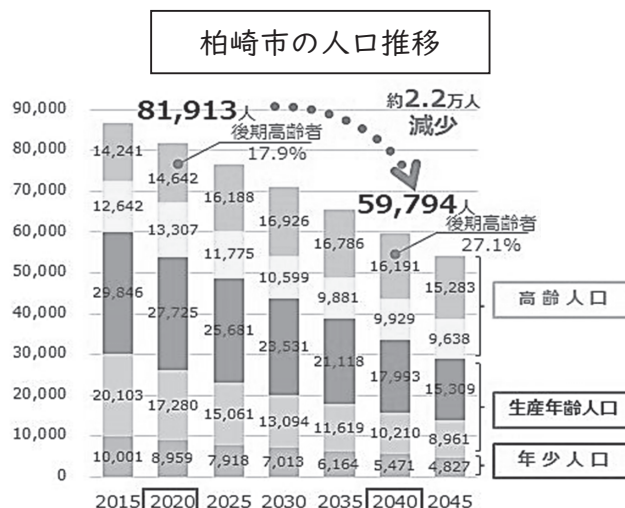
再考する場面を設けることで、生徒は自己の考えを修正・強化したり、ブラッシュアップしたりします。

単元(題材)の様子

ポイント1

地域の課題や地域の持続可能な発展を軸に、「地方自治」の学習をデザインします。単元の導入では、諸資料を通して、「住み続けられるまちづくりを進めるためにはどんなことをすべきか?」を、単元を貫く学習課題として設定します。

地域の課題を扱うことで、学習課題を自分事として捉え、切実感をもって課題の追究・解決に迫ることができます。



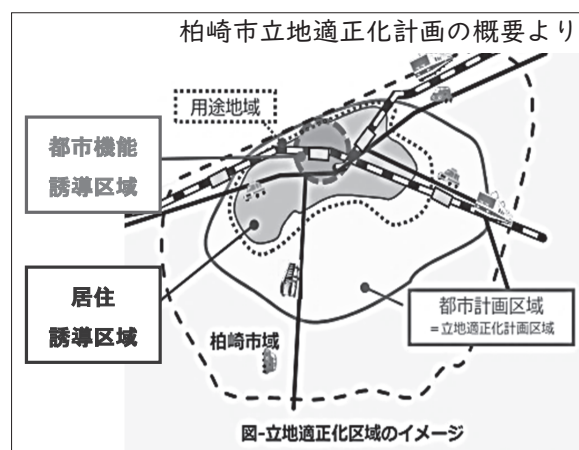
人口減少社会や高齢化が進展する中でも、将来にわたり住み続けられるまちを目指すコンパクトシティについて考えます。コンパクトシティの先進都市・富山市を例にどんな都市政策なのかを学んだ後、地元・柏崎市のコンパクトシティ化の動きに目を向け、未来のふるさとの姿に関心を持ちます。

ポイント2

- 都市の持続可能性を高めるコンパクトシティ政策の妥当性について、「効率・公正」の視点から分析を行うとともに、この政策を進めるうえでの課題に焦点をあて、その解決方法を考えます。これにより、コンパクトシティ政策を多面的・多角的に捉えることができるようになります。
- グループ内の意見交換や全体発表を通して、学びの共有を図り思考を広げていきます。

ポイント3

- 学び合いや問いかけ・問い返しなどを通して、どうしたらより多くの人にとって、暮らしやすく住み続けられるまちになるのか、再考し思考を深めていきます。



研究会

ポイント2・3

研究会ではポイント2と3の場面を公開する予定です。コンパクトシティを題材に、持続可能なまちづくりをどう進めていけばよいのか、未来のまちのあり方について考えを深める姿をご覧ください。



社会 <中越地区／長岡市・三島郡中教研>

11月27日(木) 研究会開催

研究主題：公民としての資質・能力の基礎を育成する
学習指導の工夫

～「構造化された問い」と自らの価値や行動を
決定する活動を取り入れた授業実践～

単元名：「2年：日本の近代化と国際社会」
～明治維新と立憲国家への歩み～

会場校：長岡市立栖吉中学校

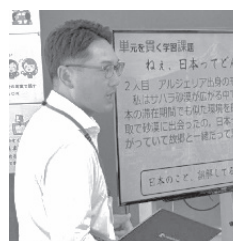
公開：1学級

授業者：笠輪 敬

指導者：長岡市教育センター 指導主事 植木 朋弘 様



研究推進責任者
長岡市立寺泊中学校
金泉 翔



教科・領域担当者
長岡市立栖吉中学校
笠輪 敬

こんな深い学びの姿を目指します

個別の歴史的事象を学んだ上で、その中から自ら課題を発見する力を育みます。さらに、自ら発見した課題を自ら解決する力も育みます。個別の歴史的事象を学ぶ際には、「構造化された問い」を解決していくことで学びを深めます。その学びの深化においては、単元内自由進度学習を取り入れ、個別的、協働的な学びを進めていきます。自ら課題を発見したり、その課題を解決する段階においては、自分の意見と他者の意見を比較し、情報を取捨選択し、多面的・多角的に考察し探究する生徒の姿を目指します。

主な手立て（『学習過程』と『深い学びの技法』の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→『深い学びの技法』のNo.1）

学んだ知識を活用して課題や目標を設定する

生徒は単元内で学んだ既存の知識を活用して、新たな課題があることに気づき、その課題解決に向けて思考するようになります。

ポイント2（思考の過程→『深い学びの技法』のNo.7）

視点の転換や逆思考をして考える

設定の過程で新たな課題を発見し、解決に向かうことができた生徒は、歴史的事象の全てが良い方向に進んだわけではないことに気づき、新たな視点で歴史を見つめるようになります。

ポイント3（表現の過程→『深い学びの技法』のNo.15）

自分の言葉で学んだことを整理しまとめる

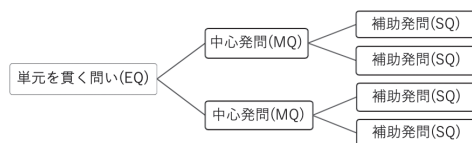
生徒は、本や資料をそのまま要約するのではなく、既存知識を活用して自分なりの言葉や表現を工夫して書いたり話したりすることで、より深い学びにつながります。

単元(題材)の様子

<「問いの構造化」について>

生徒自身が新たな課題意識をもつためには知識(概念的な知識)を身に付けることが必須です。知識や技能を身に付ける段階において「構造化された問い」を生徒が解決していきます。これにより、見通しをもって学習を進めることができるようになり、課題を発見する力につながります。

ポイント1



<生徒による探求について>

新たな課題を発見したり、課題を解決したりする段階において、個人で探求を進めたり、協働的に探究したりします。個人の探求の成果をまとめたり、その成果を共有して協働的に解決したりする際には、ICTを効果的に活用します。

これにより、歴史的な事象を見る視点が広がり、よりよい社会を創ろうとする公民としての資質・能力の基礎が育成されることを期待します。

ポイント2

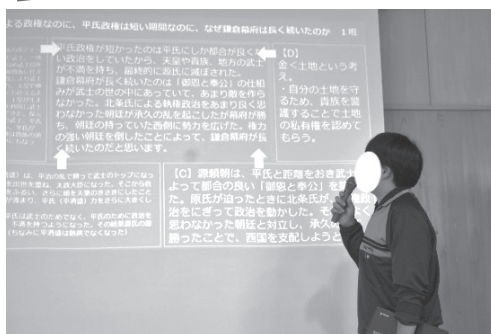


<生徒の「意思決定」「価値判断」について>

上記の2つのポイントを経て、生徒は自らの意思で課題に対する解決策を判断し、表現方法を工夫した上で発表をします。

意思決定をしたり、価値判断をしたりする姿は、公民としての資質・能力の基礎を育む姿であり、これにより、よりよい社会を創ろうとする力が芽生えることを期待します。

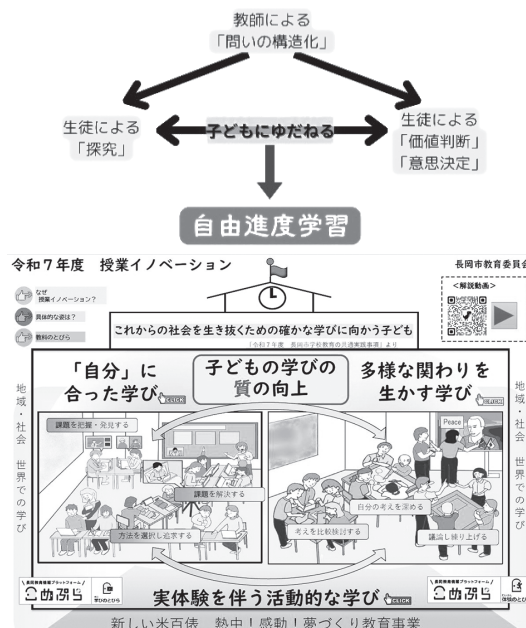
ポイント3



研究会

本研究の実践が、主題である「公民としての資質・能力の基礎の育成」に有効であったかについて協議します。

また、長岡市では「授業イノベーション」を推進しています。キーワードは「子どもが主役になる」です。このことを実現するための手段の1つとして、「単元内自由進度学習」を取り入れ実践しました。研究会では、「子どもが主役になる」ことに関して、本研究が有効であったか、また他にどのような手立てがあるのかについて併せて協議します。



社会 <新潟地区／新潟市中教研>

11月6日(木) 研究会開催

研究主題：社会認識を高め、これからを生き抜く力を獲得する生徒の育成
～学び合いを通して、子どもが自ら 考え、判断し、表現できる授業の在り方～

単 元 名：「3年：地方自治と私たち」

会 場 校：新潟市立新津第五中学校

公 開：1学級

授 業 者：渡辺 美羽

指 導 者：新潟薬科大学 教授 木村 哲郎 様



研究推進責任者
新潟市立葛塚中学校
木村 伸



教科・領域担当者
新潟市立新津第五中学校
渡辺 美羽

こんな深い学びの姿を目指します

生徒一人一人が自己を客観的に捉え（認知し）、他者とかかわり合いながら考えを広げ深める協力的な学習活動や、思考を表現に置き換えたり、多様な手段で説明したりする姿を目指します。単元を通したねらいを設定することで、生徒は見通しをもって授業に取り組み、単元により獲得した知識を用いて多面的・多角的に考察をすることで、将来の住民としてどのような行動が必要かを考えられるようになります。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.2）

住民の願いや思いに基づいて単元を貫く課題を設定する。

これにより、生徒は自分が住む町の魅力や問題点に気付き、単元を貫く課題を自分事として捉え主体的に学習に取り組みます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.9・10）

話し合いや学び合いを通して異なる多様な意見を比較して考える。

これにより、生徒は自分の意見をもち、仲間と話し合うことでより深く思考するようになります。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.19）

理由や根拠を示しながら自分の言葉で学んだことをまとめ、表現する。

これにより、生徒は一住民として自分の考えをもち地域のために将来の行動をとることができます。

単元(題材)について

生徒が「地方自治とは自分が今住む地域で行われており、それが自分たちの生活とつながっている」ということを肌で感じ、住民として「自分の住む地域を自分でよりよくしたい」という思いをもち、「そのためにはこうするべきだ」という意見をもてるように単元を構成していく。単元を貫く課題「新津を再び活性化させるために、私たちができることとは」を地域住民の願いや思いをもとに自分事として捉えさせる。「新津活性化プラン」を作成する中で地方自治における知識を身に付け、さらにその知識を基にプランを練り直していくことで、知識と知識、知識と実際の社会をつなげて考えられるようにする。単元の最後には、自分にもできることがあると気付かせたい。

単元(題材)の様子

新津地区はかつて鉄道の街として新津駅を中心に活性化していました。しかし、現在は活気がなくなりつつあり、生徒はかつての新津を知りません。また新津に住む人々の「新津をより良くしたいという」思いに触れることで、生徒に目的意識をもたせ、自分事として単元を貫く課題に取り組ませていきたいです。(学びに向かう力)

ポイント1



商店街通りに設置されている蒸気機関車の動輪
= 2日、新潟市秋葉区

新津活性化プランをグループで作成します。

授業と活性化プランをリンクさせ、プランを見直しすることにより、地方自治の考え方や仕組みと社会的事象をつなげて考えられるようになります。(知識・理解、思考・判断・表現)。

ポイント2



完成した新津活性化プランを行政や地域住民に提案し、アドバイスを基に秋葉区への要望書を作成します。これにより、自分の意見をもって行動できる住民を育成します。(表現、学びに向かう力)

ポイント3

研究会

3年生の授業を公開します。地域の方を招き、新津活性化プランをよりよくするためのアドバイスをもらい、改善する姿を見てもらう予定です。生徒が新津をより良くするために主体的に考察する姿を見てください。

ポイント1・2・3



商店街のアーケードに七夕の短冊を飾り付ける新潟薬科大の学生たち=6月29日、新潟市秋葉区

社会 <下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研>

10月29日(水) 研究会開催

研究主題：資質・能力を育む深い学びにいたる授業の創造
～社会的な見方・考え方を働かせる工夫を通して～

単 元 名：「3年：地方自治と住民の参加」

会 場 校：阿賀町立三川中学校

公 開：1 学級

授 業 者：頭川 玄

指 導 者：下越教育事務所 学校支援第2 課長

阿賀町立三川中学校 校長

白澤 道夫 様

佐藤 雅秀 様



研究推進責任者
五泉市立五泉中学校
高橋 保嗣



教科・領域担当者
阿賀町立三川中学校
頭川 玄

こんな深い学びの姿を目指します

研究推進委員会では、生徒が社会的な見方・考え方を働かせて社会科で育む資質・能力を獲得することを深い学びの姿と捉えました。生徒が見方・考え方を働かせて思考できるように教師が三つの手立て（三本柱）で働きかけます。生徒は、その手立てを基に自己の見方・考え方を広げて思考、判断、表現することで、課題解決力や応用力、社会形成に参加する態度を獲得することを目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.2）

生徒が身近なものや生活と関連付けたり活用したりすることで、「自分事として捉える工夫」をする。

これにより、主体的な学びが促され、社会を作っていくという社会の形成者としての自覚が生まれます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.7・8）

生徒が社会的な見方・考え方を働かせる姿を意識して、「深める問い」を設定する。

これにより、共通認識や汎用性、関係性を見いだすことができ、課題を解決する力が身に付きます。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.9・10）

学び合いの工夫や毎時の適切な問いの設定により「言語活動の充実」を図る。

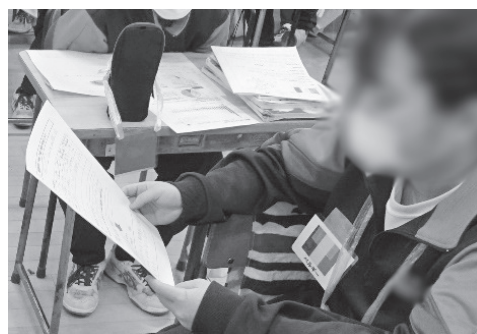
これにより、仲間と共に議論したり、説明や表現したりする場面が生まれ、学んだ知識を活用するようになります。

単元(題材)の様子

社会的事象に対して活発な思考を促すために、生徒の生活に身近な教材を提示し、課題を自分事と捉えさせる工夫をします。本単元では、自分たちが住む町を事例に地方自治について学び、存続可能な町にするために必要な政策を考え、最終的には町に提言するというゴールを目指します。生徒は、さまざまな面と関連付けながら学習を進めていくことで社会的事象と向き合い、教材をより身近に感じ、考え、深めていきます。

これにより、社会参画の意識が芽生え、主体的に課題を解決しようとする力が身に付きます。

ポイント1



生徒各々が担当の国を決めて教材と向き合う
(昨年度の実践より)

生徒同士の対話を深い学びに向かわせるために、見方・考え方を働かせることができる「深める問い」を設定します。対話の場面では積極的に意見交換をするものの、最後は特定の生徒の意見や授業者のまとめで終わりにしないためにも、見方・考え方を働かせた問い＝「深める問い」を投げかけます。

これにより、社会的事象の定義や関係性、課題に対して広く対応できるような性質を見いだすことができ、課題を解決する力が身に付きます。

ポイント2



深める問いの設定

生徒が「なぜ?」と感じたり、解決したいと思ったりする問いの設定と対話を促す働きかけにより言語活動の充実を図ります。毎時の問いの解決が事実を捉え、知識の獲得になり、知識を活用する土台ができます。また、学び合いを促すために形態・視点・ツールを工夫します。

これにより、学んだ知識を根拠や論拠にし、学び合いの活性化、さらには相手に考えを分かるように伝える表現力が身に付きます。

ポイント3



学び合いの工夫
(タブレット端末による意見の可視化)

研究会

3年生の公民的分野の「地方自治と住民の参加」で授業を予定しています。

昨今、消滅可能性自治体が公表される中で、自分たちの住む町はどうなるのか。存続可能な町になるにはどんな政策が必要なのかを社会的な見方・考え方を働かせて考える授業を予定しています。



理科

「ああ、そういうことか」、 「私、間違ってたなあ」と、 分かり直しができる授業

生徒が仲間に自分の考えを理解してもらおうと、図やモデルを描き始めたらしめたものです。そこには、生徒が言葉にしづらい事象の仕組みに対しての解釈が表現されているはずです。それらを教師が価値づけたり仲間と分かり合う過程をもうけたりすることで、確かめるべき問題が明確になることもありますし、あやふやだった解釈が明瞭になることもあります。



県中教研 理科部 全県部長
五泉市立五泉中学校

校長 大川 正史

自分の当たり前が仲間の「意外」や「飛躍」になると教える

生徒が分かり直すというのは、事象の仕組みを理解したときに「だからあのときはこうなったのか」と、自分の既知の事象と新たな知識とがつながって、既知の事象の見方が再構成されることである。この姿を大切にしたい。

しかし、理科の授業において、実験には一生懸命取り組むが、そこで得た事実が知識として定着しないことがある。それでは新たな事象を見ても既知の知識とのリンクが起これにくい。

このような、分かっているようで分かっていない生徒を深い学びに到達させるには、言語活動を見直す必要がある。

例として、ジャガイモにヨウ素液を滴下する実験を挙げる。この実験の振り返りに「ジャガイモにヨウ素液をかけると青色になることが分かった」と書く生徒は多いだろう。これ

は実験で得た事実を述べただけで、問題の結論になっていない。前述の「ジャガイモに…」の振り返りは、本来は、下の図のような3段階法によりジャガイモとデンプンとが結びつくはずだが、ヨウ素液の性質という既習事項を引用していないため、結論に到達しなかった例である。着目すべきは、結論に到達している生徒もこの2段階目の記述をしないことがほとんどであることだ。結論に到達した生徒にとっては、2段階目の記述は暗黙知であり、いちいち書かないし言わない内容なのだ。だから、分かっているつもりの生徒には論理性が伝わらず、事実暗記の学習になってしまうのである。教師はこの2段階目の既習事項や生徒の暗黙知を「論拠」と位置づけ、可視化の工夫をし、さらに、生徒に表現を磨かせる過程を組織する必要がある。

ジャガイモにヨウ素液をかけると青紫色になる。

(事実：根拠)



デンプンにヨウ素液をかけると青紫色になる。

(既習事項：論拠)



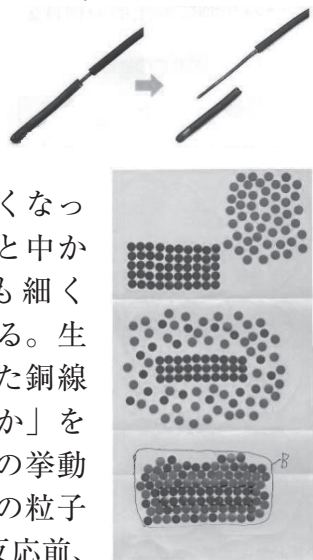
ジャガイモにはデンプンがある。

(結論)

事象を変化として捉えさせるため、連続性を表現させる

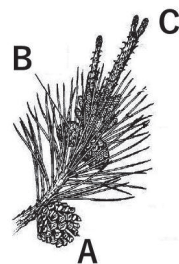
事象の要因の多くは目に見えないため、可視化して連続的に表現させることが有効である。それにより、事象を要因による変化と捉えさせることができる上、要因を条件変更させることで事象はどう変わるかを予測し検証させることで仮説を確かにできれば生徒は科学の面白さを実感するだろう。

右図は硫黄と銅線を試験管内で加熱してできる硫化銅で、全体の太さは銅線の時よりもわずかに太くなっている。それを折ると中からもとの太さよりも細くなった銅線が出てくる。生徒が「中から出てきた銅線がなぜ細くなったのか」を追究する過程で原子の挙動を表現したものが右の粒子モデルである。上が反応前、中が反応中、下が反応後である。この生徒は、硫化銅の部分(図中のB)は硫黄と銅とが入り組んで並んでいる部分だと示している。粒子モデルには、銅線が硫化銅になる過程で全体が太くなることや、中の銅線部分が細くなることが表現されており、生徒自身の考えと実際の事物現象との整合性が高く、仲間の賛同を多く得ていた。その後、「硫化銅の中の銅線をもっと細くするにはどうすればよいか」と問うと、「硫黄の量を増やす」とか「加熱時間を長くする」等の方法が出てくる。大切なのは、なぜその方法でうまくいくと考えるのかをこのモデルで表現させることだ。時



間をかければ硫黄の粒が中まで入り込むと考えているのか、時間をかけても硫黄が足りなければ反応は進まないと考えているのかを明らかにすれば、定比例の法則を学ぶ価値が出てくる。それらの理由が生徒から出てくるように、細かな追発問をしたり、わざと解釈を誤って生徒を揺さぶったりするのが教師の力量だろう。

右図は松の雌花と雄花の模式図で、Aは2年前の雌花である。植物の生長は成長点が先へ先へと伸びてゆくが、ともすると髪の毛のように根元から新しい茎や枝が生まれてくるようにイメージをもっている生徒もいる。



そこで、A B Cそれぞれが年毎にできる雌花であることを伝えた上で、1年前、2年前にそれぞれの雌花はどこにあったかを問い、右図を基準にして1年前と2年前の図を描かせて、仲間と比べさせるのも、植物の成長という事象を変化として捉えさせるには効果がある。

「○○すればするほど□□になる」と変化の要因を意識させるには、課題や発問を工夫する必要がある。浮力を実感させようと生徒にバスケットボールを水没させ、何か気付いたことが無いかと問うても、「浮力は強い」と感想程度の気付きしかもたせられない。しかし、ボールは沈め始めこそ簡単に沈むが、沈めば沈むほどさらに沈めるのは難しくなる。その変化を表現させてこそ深い学びが実現できるのである。

理科 重点方針

目的意識をもって科学的に自然を調べる能力と科学的な思考力を育てる学習活動の展開に努める。

- 観察や実験の予想を検討したり、結果を整理し考察・吟味したりする学習活動の充実を図ることを通して、目的意識に裏打ちされた科学的な思考力、表現力を高める。
- 他者との関わりや問題解決的な活動において、生徒が科学的な見方・考え方を働かせるための手立てを行う。
- 地域の環境や学校の実態を生かした自然体験、科学的な体験を通じた実感を重視し、自然事象の認識と科学への興味、関心を一層高める。

理科 <上越地区／上越市中教研>

11月11日(火) 研究会開催

研究主題：課題解決に向けて科学的に探究する生徒の育成
単元名：「1年：身のまわりの現象」

～なぜ反射板はどこから光を当ててもまぶしいのか～

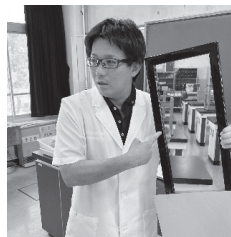
会場校：上越市立城東中学校

公開：1学級

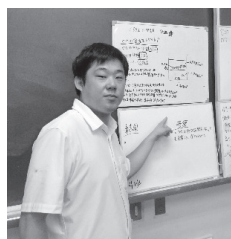
授業者：堀越 諒太

指導者：上越教育事務所学校支援第2課

指導主事 植木 厚夫 様



研究推進責任者
上越立城西中学校
中野 祐輔



教科・領域担当者
上越立城東中学校
堀越 諒太

こんな深い学びの姿を目指します

生徒が既習事項を振り返りながら考えることができ、主体的に探究したくなるような課題の設定及び提示が生徒の学びの深まりにつながると考えています。本研究では、「生徒が、自己の学びを振り返りながら学びをつなぎ、科学的に探究できること」を深い学びと捉え、生徒が「理科の見方・考え方」を働かせながら、問題を見いだして解決策を考えたり、知識を相互に関連付けてより深く理解したりする姿を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1・2）

日常生活における身近な現象を提示したり、既習内容を想起させたりし、生徒が十分に話し合う場を設定する。

これにより、生徒は自らの手で素朴な疑問から課題を見つけ出せるようになり、探究への意欲をもてるようになります。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.9・10）

日常生活における身近な現象について様々な方法で探究し、議論する。既習の知識や技能を活用する場を設定する。

これにより、生徒が実験結果を基に論理的に考えたり、他者との共有をしたりしながら、考察をより科学的なものにできるようになります。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.13）

実験結果や仲間の意見を根拠として、身のまわりの自然現象を論理的に説明する。

これにより、生徒は自己の学びをつなぎながら、科学的に自然現象を解釈し、説明付けることができるようになります。

単元(題材)の様子

反射板が映る動画を視聴し、反射板が光源の位置が変わってもいつまでもまぶしく光り続けることから、既習事項とズレが生じていることに気がきます。これにより、疑問から課題を見い出し、課題を自分事として捉え、主体的に探究しようとする態度につながります。

ポイント1



様々な光源や鏡等を複数用意します。生徒自身が予想を基に自由に実験方法を考え、検証します。生徒の自己選択した解決の方策を生かし、小グループでの探究を共有しつつ「複線型の学び」で課題解決に向かいます。

探究の過程における気づきの共有により解釈・分析をより妥当性の高いものにできるようになります。

ポイント2



課題(反射板の仕組み)について、小グループごとの実験結果や仲間との対話の結果を基に作図や記録写真などを用いて説明を考えます。実験結果を根拠とした論理的な説明をする中で作図や記録写真から導き出す客観的な光の道筋と主観的な自分が見た光の見え方を関連付けて考えることができるようになります。

可視化された光の道筋と自己の主観的な見え方との関係付けを行ったり、仲間の意見との比較を行ったりする過程で、生徒は「理科の見方・考え方」を働かせながら、深い学びに向かいます。

ポイント2・3

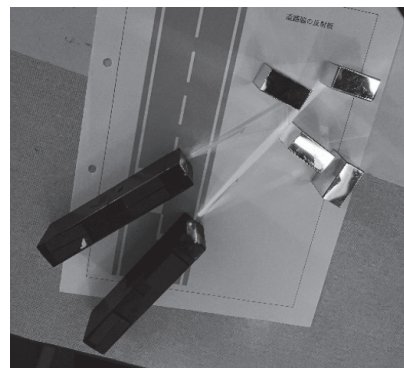


研究会

研究会当日は、「反射板がどこから光を当ててもまぶしいのはなぜか」についての問題解決型の授業を行います。様々な実験道具から選択し、実験方法を考



え、「複線型の学び」で主体的に課題解決に向かいます。課題を自分事として捉え、主体的に探究する深い学びの姿をご覧ください。



ポイント1・2・3

理科 <中越地区／南魚沼市・南魚沼郡中教研>

11月20日(木) 研究会開催

研究主題：「生きて働く知識」を形成する授業づくり
～練り合いを通して知識を再構成する学びの実現～

単元名：「3年：化学変化とイオン」
～酸・アルカリとイオン～

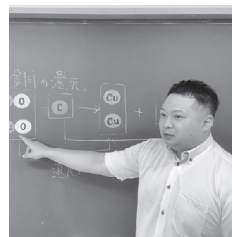
会場校：南魚沼市立六日町中学校

公開：1学級

授業者：岡崎 一洸

指導者：中越教育事務所 学校支援第2課

課長 上村 貴雄 様



研究推進責任者
南魚沼市立塩沢中学校
高橋 悠太



教科・領域担当者
南魚沼市立六日町中学校
岡崎 一洸

こんな深い学びの姿を目指します

学習した知識を、仮説の設定や実験結果の考察の場面で活用し、既習事項を手がかりに粘り強く考え続ける姿を目指します。また実験結果を、モデルを用いた4コマで表現する活動を通して、生徒は「より事実在即しているか」「他者に伝わりやすいか」といった視点から表現を工夫し、対話を重ねながら考えを練り上げていきます。このような過程を経て、自分の考えを更新し、知識の学び直しや概念の深い理解につなげていきます。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

初発の考えと既習事項や実験結果を比較し、対話を通してよりよい考えへと練り上げる活動を設定する。

これにより生徒は、単に用語を覚えるだけでなく、他者との対話を通じて多角的に考え、論理的に説明しようとしています。

ポイント2（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.14）

単元を通して手触り感のあるモデルを活用して、実験結果を表現する。

これにより生徒は、モデルを活用しながら、実験結果を視覚化し、より事実在即した考察をするようになります。

ポイント3（評価の過程→「深い学びの技法」のNo.18）

「振り返りシート」を用いて、身に付けた資質・能力をメタ認知し成長につなげる。

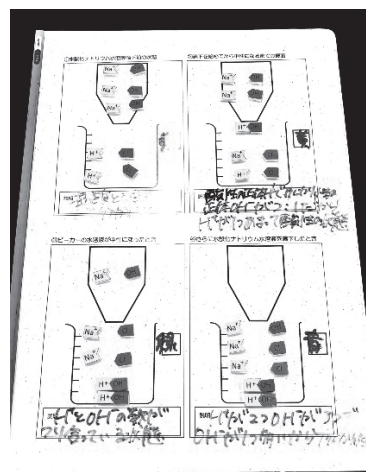
これにより生徒は、自分の学びを客観的に捉え、覚えたことやできるようになったことを、次の学習に生かそうとするようになります。

単元(題材)の様子

初発の考えと既習事項、実験結果とを比較しながら、自分の考えを更新し、より妥当なものへと練り上げていく対話活動を授業に取り入れていきます。

特に、実験結果を4コマで表現する場面では、生徒同士の表現の違いに注目させ、「より事実在即しているか」「他者に伝わりやすいか」といった視点をもって練り合いを行うことで考えを深めていきます。既習事項であるイオンの挙動や水溶液の性質についての知識を活用し、化学変化の仕組みをより現実近づけて考察することができ、深い理解につながっていきます。

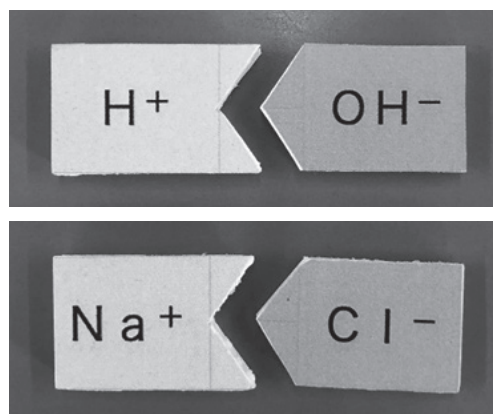
ポイント1



イオンのモデルを実際に手で操作することで、生徒は目に見えない粒子の存在を、実体として捉える感覚を養うことができます。

授業ではこのモデルを、単元を通して活用し、実験結果の考察や表現に取り組んできました。こうした活動を通して、「粒子領域」で重視される質的・実体的な見方を働かせ、思考をより深めるとともに、表現の精度も高まります。さらに、このモデルをホワイトボード上で複数の生徒が同時に操作することで、自然と意見の交流が生まれ、対話的な学びを促進します。

ポイント2



対話的な学習活動の土台となる知識をいつでも確認できるよう、学習のまとめりごとに振り返りシートを活用し、生徒に記述させます。これにより生徒は、これまでの授業で何ができるようになったのかを整理し、自分自身の学びを自覚(メタ認知)する力を育んでいきます。

ポイント3

理科単元3-3 学びのあしあと

3年 組 番 氏名

【単元を通して考える課題】

酸性の水溶液とアルカリ性の水溶液を混ぜ合わせると何が起こるか。図や文章で説明しよう。

〈単元の学習前〉

〈単元の学習後〉

研究会

研究会当日の授業では、前時に行った「中和の滴定実験」をモデルを使いながら考察し、より事実に近い表現を目指して練り上げる活動を行います。



既習事項の活用と対話を通して、粘り強く考察する生徒のようすをご覧ください。

ポイント1・2・3

理科 <新潟地区／新潟市中教研>

11月6日(木) 研究会開催

研究主題：探究学習による深い学びの促進

単元名：「2年：電流・電圧と抵抗」

会場校：新潟市立下山中学校

公開：1学級

授業者：武藤 啓将

指導者：新潟市立総合教育センター 指導主事 川上 辰朗 様



研究推進責任者
新潟市立宮浦中学校
間 英法



教科・領域担当者
新潟市立下山中学校
武藤 啓将

こんな深い学びの姿を目指します

生徒が「課題の把握」「課題の追究」「課題の解決」という「探究の過程」を繰り返すことで、自分の考えを深めていく姿を目指します。そのためには、生徒一人一人が仮説を立てることが肝要で、その手立てとして単元計画の中で電流を「粒子の流れ」という粒子概念で捉えさせます。子どもの思考を検証しやすいように、粒子モデルを用いた実験をおこなわせます。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）

目に見えない電子の流れを粒子概念という見方で、単元を通して捉える。

これにより、生徒は粒子が流れるというイメージで電流の流れを捉えられるようになります。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.15）

既習事項を元に、課題に対して生徒一人一人が仮説を立てて実験で自分の考えを検証する。

これにより、生徒は自分の考えに自信をもつようになります。仮説が間違っている場合でも修正することで学びが深まります。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.18）

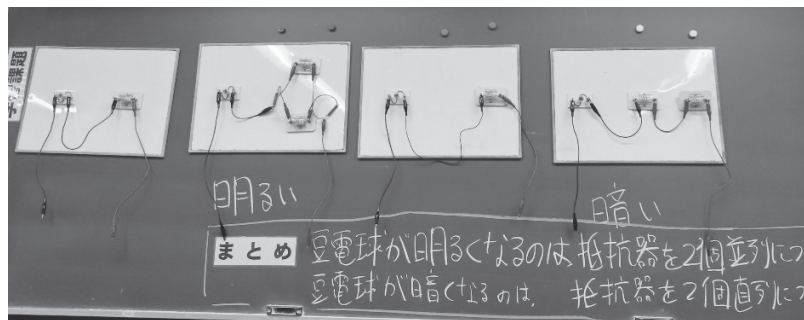
モデル化された教材を活用して、粒子概念を説明する。

これにより、生徒は目に見ることができない電流の流れを視覚化し、課題の解決のために活用できるようになります。

単元(題材)の様子

目に見えない電流の流れを「粒子の動き」として捉える見方を育てる。これを単元を通して繰り返し行うことで、現象を一貫した視点で説明できるようにします。

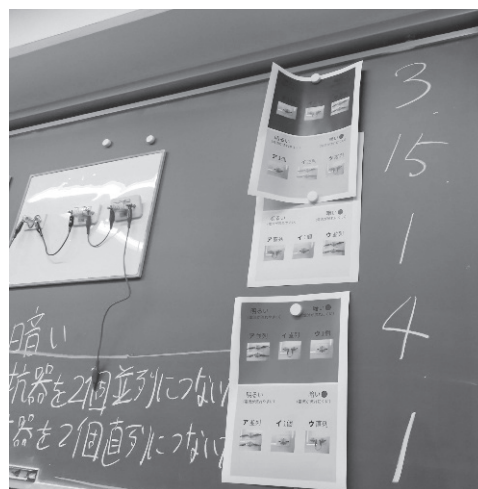
ポイント1



単元を通して、仮説→検証→考察→振り返りという学習過程を繰り返します。繰り返すことで「探究」という、自分の学びを深める学習スタイルを身に付けさせます。

本時の課題は「電気抵抗のつながりで回路全体の抵抗がどのように変わるのか」です。授業の冒頭で、回路における電流の流れ方について、自分なりの予想を立てさせ、直感的な問いをもつことを促します。その後、モデルを操作して直列回路と並列回路で球の流れ方を比較し、得られた気づきをもとに、班で仮説を立てる活動へとつなげます。

ポイント2

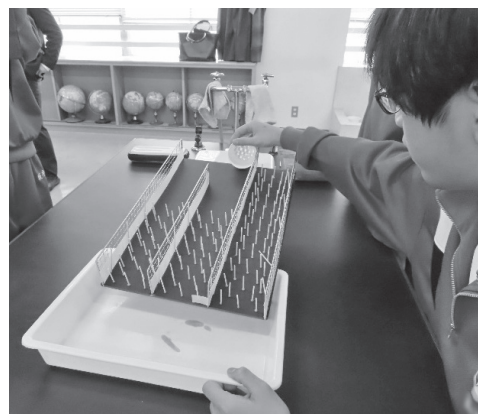


電流の動きを理解させるために、直列・並列回路に見立てたモデルを使って「粒子の流れ」を構造的に捉えさせます。

本時では、生徒がモデルを実際に操作しながら、球の動き方を観察し、図や言葉で表現する活動を通して、自分の考えを説明する力を高めます。

これにより、電流や抵抗といった抽象的な概念を、粒子のモデルで可視化しながら理解し、他者に分かりやすく伝えるようになります。

ポイント3



研究会

粒子概念の理解のためにモデル実験がポイントだと思っています。粒子モデルは何を使えばいいか、抵抗はどうか、生徒が捉えやすいのか、研修員が工夫したアイデアを持ち寄り、情報交換してきました。研究会で成果をお見せしたいと思っています。



理科 <下越地区／村上・岩船郡中教研>

10月10日(金) 研究会開催

研究主題：理科における深い学びにいたる授業
～表現活動を通して～

単元名：「3年：化学変化とイオン」
～塩化銅水溶液の電気分解～

会場校：村上市立山北中学校

公開：1学級

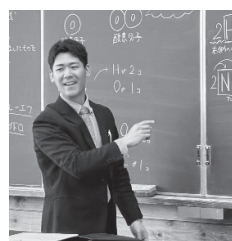
授業者：須貝 将士

指導者：下越教育事務所 学校支援第2課

指導主事 鈴木 淳 様



研究推進責任者
村上市立村上東中学校
佐藤 隆洋



教科・領域担当者
村上市立山北中学校
須貝 将士

こんな深い学びの姿を目指します

学習活動の中で事象の仕組みを説明する場面を設定し、その中で協働的に表現活動（アウトプット）していく姿を目指します。既習事項を活用しながら思考する場面を設定し、役割を決めて考えを説明するよう指示することによって、生徒は自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞いて自分の考えを修正したりしながら、協働的に表現活動をすることで、深い学びにいたります。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

既習事項と比較させ、知識や表現方法を活用する場面を設定する。

これにより、生徒は既習事項を振り返りながら、学習モデルを利用し表現するようになります。

ポイント2（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.10・14）

コマ割りで変化を表す活動において、変化の過程を班のメンバーで分担して連続的に表現する。

これにより、生徒は担当のコマをつくるために班員と協働しコマ同士の流れや表現の仕方を工夫するようになります。

ポイント3（評価の過程→「深い学びの技法」のNo.18）

各班で、コマをつなげて全体の流れを説明する活動を組織する。

これにより、生徒は変化の過程を視覚的に捉え、電気分解の仕組みを理解できるようになります。

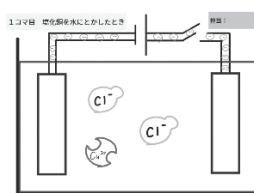
単元(題材)の様子

塩化銅が電離した様子をイオンモデルを使って表現するために、食塩や塩酸の電離の様子を振り返ります。

これにより、塩化銅が水溶液中で電離し、銅イオンと塩化物イオンに分かれることを表現できます。

ポイント1

塩化銅が電離したときの様子を表現したコマの例



電圧を加えたときに電極で起こる変化の仕組みを班員と協働しながら理解させるために、コマ割りで表現する課題を設定します。両極で起こる事象の目に見えない仕組みを、電圧をかけたときのイオンや電子の移動に着目し、班内で分担して表現します。

これにより、生徒は担当のコマを完成させるために班員と対話しながら協働的に活動することができます。コマをつくる過程で互いに説明し合うことで、より分かりやすい説明や表現ができるようになります。

ポイント2

自分の担当のコマを、他の班員のコマを参考にして作る様子(昨年度のプレ授業から)



イオンや電子という目に見えないものの動きをモデルを活用して考えます。

これにより、イオンや電子の様子を視覚的に捉えることができ、生徒は電圧が加わったときの変化をモデルを使って表現することができるようになります。

ポイント2

コマを並べ、全体の流れを説明し合う様子(昨年度のプレ授業から)



電圧をかけたときの反応の仕組みを理解するために、両極でのイオンや電子の移動をそれぞれの担当者が説明し合う活動をします。

これにより、イオンや電子の移動に着目して反応の仕組みを理解することができます。

ポイント3

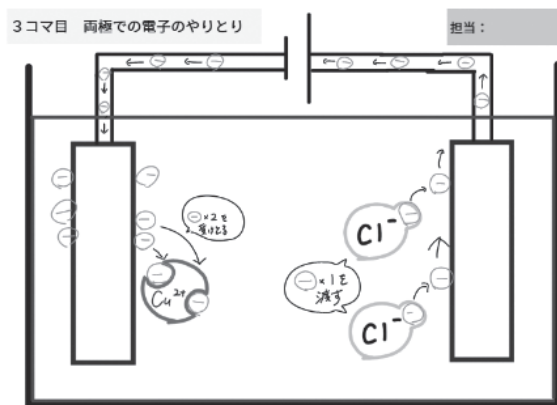
研究会

“塩化銅水溶液を電気分解したときの両極での反応の仕組みを説明しよう”を課題とし、表現活動を通して深い学びの姿を目指します。

コマ割りで表現する活動が一人ひとりの主体性を引き出し、深い学びにつながるのか考えていきます。

ポイント1・2・3

電子のやりとりを表現したコマの例



英語

英語の授業で深い学びにいたるために、 「深い学びの技法」をいかに活用するか

外国語科において、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るために、「深い学びの技法」を授業のどの場面で、どのように用いれば良いのでしょうか。

また、授業者はどのように授業を作っていけば良いのでしょうか。

生徒の学習過程と技法の関わりという視点から考えてみたいと思います。



県中教研 英語部 全県部長
長岡市立小国中学校

校長 荒川 高明

外国語教育で「深い学びにいたる」ということ

学習指導要領では資質・能力は言語活動を通して育成されるとあります。また、「深い学び」のカギとして「見方・考え方」を働かせた言語活動を行うことが重要だとしています。

県中教研では「深い学び」を「既習の知識や技能をもとに新たな知識や技能を関連付け、精緻化するなど思考や認識が高度化して

いる様相」としています。言語活動で①場面・目的・状況を理解し、②見通しをもち、③目的達成のためのコミュニケーションを行い、④英語の正確さや表現の適切さを向上させていくことにより、「思考力・判断力・表現力」が高まり、深い学びにいたるのだと考えます。ここに技法を位置付けることで授業者の意図が明確になります。

深い学びにいたる「学習過程」と「深い学びの技法」の工夫

今年度、各地区の実践では以下のような単元（題材）を設定し、深い学びの姿を目指しました。

- 海洋ごみ問題について読んだうえで、自分の意見や考えを加え、伝え合う活動。環境問題を自分事として捉え、自身の発話を練り上げていく。
- フィリピンの学生が知りたい日本文化についてオンライン会話を行う。伝えきれなかった内容やもっと伝えたいと思った内容についてメールを書く。
- 総合的な学習と関連させ、自分が興味・関心がある街づくりの視点を選び、地元を知ってもらうための30秒CMを作成する。
- 生徒自身が選択した「日本のおすすめの○○」をALTに伝える、という単元末課題に向けて、やり取りの質と量を段階的に高めたり、増やしたりしていく。

生徒の学習過程



学びの技法 No.18
生徒の振り返りによる
形成的評価は、次の
授業を構想するう
えで重要(指導と評
価の一体化)

設定の工夫 深い学びの技法No.1・3

- ・目的・場面・状況が明確な課題であること。
- ・生徒にとって身近な題材や課題であること。
- ・自分自身に関連付けられる課題設定であること。

生徒が目的意識をもてるようにする

思考・解決の工夫 深い学びの技法No.8・9・10

- ・思考を深めるために考えの過程を視覚化する。
- ・個人から仲間へ、言語面と内容面で練り合いや練り上げをする。学び合いによる再考と改善。
- ・やり取りや中間指導を経て、自分の考えを再構築する。

- ・「他者の考えを聞きたい」という生徒の思いを引き出せると良い
- ・中間指導を行うタイミングを考える

表現の工夫 深い学びの技法No.14・15・16

- ・ステップごとの振り返りにより現状把握し、見通しをもたせる。
- ・獲得した知識・技能を活用して発表ややり取りを行う。知識を活性化させ、定着を図る。言語知識を蓄積・修正する。

- ・モデル文(ゴールの例)があると、見通しがもちやすい
- ・Chat等自己表現活動の繰り返しにより、話す・聞くことに慣れる

深い学びの技法をいつ、どう使えばよいのでしょうか。単元や授業を構想する際に、授業者が行おうとする活動と、深い学びの技法を照らし合わせて、意味付け・価値付けを試みるのはどうでしょうか。

なぜその活動を行うのか、何を意図するのか、というセンスメイキングの視点を持ち、どの技法にあたるかを照らし合わせることで、深い学びの技法は活動を行う根拠になると考えます。

また、このように深い学びの技法によって意味付けされた活動が適切であったかどうかは、生徒の振り返りや授業者の自己評価により、次の学びにつながったり、改善が図られたりしていくのではないかと考えます。

英語 重点方針

学習指導要領(外国語)の趣旨を正しく理解し、その目標を実現する取組を着実に推進する中で、適切な言語活動を通して、英語で目指す資質・能力を確実に育成する。

- CAN-DO リストから単元の学習到達目標を設定・共有し、どの生徒も無理なく目標に迫ることができるように指導内容をバックワードで配列して行う指導を徹底する。
- 学習指導要領に示されている4技能5領域における言語活動例を視点に、折に触れて自校の指導の現状をチェックし、領域に偏りがないようバランスよく指導する。
- 即興的な表現力を育む言語活動を継続的に授業に位置づけ、進歩を実感させながら生徒の主体性や学習意欲を維持・増進させ、自立して学び続ける生徒を育成する。

英語 <上越地区／糸魚川市中教研>

11月11日(火) 研究会開催

研究主題：理由や根拠をもち、自分の考えや意見を表現できる生徒の育成

単元名：「3年：PROGRAM 6

The Great Pacific Garbage Patch」

会場校：糸魚川市立能生中学校

公開：1学級

授業者：石野 佑紀枝

指導者：上越教育大学 教授 大場 浩正 様

上越教育事務所 指導主事 久保 成毅 様



研究推進責任者
糸魚川市立糸魚川東中学校
森 瑤子



教科・領域担当者
糸魚川市立能生中学校
石野 佑紀枝

こんな深い学びの姿を目指します

理由や根拠をもち、自分の考えや意見を表現できる生徒の育成を目指します。生徒はコミュニケーションにおける目的・場面・状況に応じて、知識や技能を関連付けたり読んだ内容を踏まえたりしたうえで、仲間と関わり合いながら言語活動を繰り返すことで、自らの考えを練り上げていきます。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）

コミュニケーションを行う目的・場面・状況が明確な課題を設定し、単元のスタート時に生徒と教師が共有する。

これにより、生徒は言語活動において「見方・考え方」を働かせ、言語面・内容面での思考を深めていきます。

ポイント2（思考、解決の過程→「深い学びの技法」のNo.8・9・10）

思考を深める・練り上げるための協働学習の場を設ける。

思考を深める問いを使った生徒同士でのやり取りや、言語活動での中間指導の場を経て、生徒は自分の考えを再構築していきます。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15・16）

課題や学習内容に合わせて、生徒が思考を深めるための工夫をする。

ホワイトボードやICTを用いて考えの過程を視覚化することで、生徒は論理的に自らの意見を表現します。

単元(題材)の様子

コミュニケーションを行う目的・場面・状況が明確な課題を設定し、生徒と教師が共有することから単元の学習が始まります。生徒はここで実際に課題に取り組むことで、課題達成のために何が必要かを考えます。

単元を通して類似の言語活動に取り組んだり、教科書本文の内容を読んでいたりして、単元目標の達成に向けて生徒は学びを深めていきます。

ポイント1

帯活動のsmall talkでは、生徒は互いの考えを深め、会話を継続する練習を行っていきます。聞き手は話し手に対して、“Tell me more.” “For example?” “Tell me the episode.”などのオープンクエスチョンを使い、話し手の話題を深掘りする手助けをします。

これにより、一つの話題について自分の考えを深めていくことができるようになります。好きなものをただ羅列するレベルから、“I like matcha because it's sweet.” “I often eat matcha ice cream.” “I ate matcha on a school trip last year.”とより考えの深まった発話が見られるようになります。



ポイント2

パフォーマンス課題に向けた類似タスクを設定し、言語活動を経て中間指導を行います。「言いたかったけれど言えなかった」表現等を生徒同士、全体で対話しながら、解決策を見つけ、パフォーマンス課題に向けて表現などを蓄積していきます。



ポイント2

生徒同士でのやり取りでホワイトボードを用いたり、中間指導においてICTを活用したりします。

これにより、自分の考えを視覚化し、論理的に考えを表現する生徒を育成します。

ポイント3

研究会

研究会では、海洋ゴミ問題について読んだうえで、retellingに自分の意見や考えを加え、伝え合う活動を行う予定です。

環境問題について自分事として捉え、課題を達成するために、仲間と言語活動を通して自身の発話を練り上げていく生徒の姿をご覧ください。

ポイント1・2・3



単元末には、海洋ゴミ問題に立ち向かう青年活動家にあてた、彼の活動についての感想や地元の海のために自分ができることを伝える手紙を書きます。(パフォーマンス課題)

英語 <中越地区／加茂市・南蒲原郡中教研>

11月26日(水) 研究会開催

研究主題：目的・場面・状況に応じて、伝えたい内容を適切な表現を用いて伝えようとする生徒の育成

単元名：「3年：Lesson 5 Translating Culture」

会場校：田上町立田上中学校

公開：1学級

授業者：伊藤 エリカ

指導者：新潟大学附属長岡中学校 教頭 川田 昌宏 様



研究推進責任者
加茂市立須田中学校
渡邊 未緒



教科・領域担当者
田上町立田上中学校
伊藤 エリカ

こんな深い学びの姿を目指します

言語活動をすすめる目的や場面・状況を正確に理解し、自分の伝えたいことと知識、表現を結びつけながら、相手に自分の伝えたいことが正確に伝わることを楽しんでいる姿を目指します。

ALTの故郷であるフィリピンの学生との交流を通して、仲間とともにゴールに迫る過程で、英語が自分にもたらす有用性にも気付いていきます。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

複数単元を通して、既習事項を含めた「話すこと（やり取り）」から始まる授業を展開する。

やり取りの中での言語知識を蓄積・修正し、自分の伝えたい内容をより詳しく正しく発信できるようになります。

ポイント2（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

個人的思考から、仲間との練り合いや練り上げをする学習課題を設定する。

仲間の表現を自分の表現に生かしたり、互いに協力したりして、より伝わりやすい表現に調整します。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.14）

単元ゴールを示すモデル文の提示と、各ステップにおける振り返りを充実させる。

ゴールに向かって生徒が見通しをもって学習に取り組み、個やペア、グループでの学びのプロセスを振り返ります。

✎ 単元(題材)について

本単元では、相手の知りたい日本文化について、正しい英語表現を使って伝えます。そこで、フィリピンの学生と、オンライン会話を行い、さらに、伝えきれなかった内容や、もっと伝えたいと思った内容を、メールで伝えることをゴールとします。彼らから日本のマンガやアニメ、音楽や言語など、興味のあることを聞き出す活動を継続して行い、自分の伝えたい事柄について、関係代名詞節を使って説明します。その過程で、相手の理解が深まるために、どんな表現方法が適切かを考え修正し、より良い英語表現を求めていく場面を設定します。

✎ 単元(題材)の様子



相手の日本文化に対する興味を知るには、どんな質問をすれば良いのか。さらに聞き出した興味をより詳しく知るには、どんな質問を加えていけば良いのか。実際のコミュニケーション場面を想定し、ペアでのsmall talkを繰り返します。話した内容を、自分自身または仲間と修正し、small talk bankに蓄積していきます。中間指導では、教員が適切な文にリキャスト(言い直し)したり、

適切な発音でリピート(繰り返し)させたりすることで、自分の伝えたいことを、より正しい英語で表現できるようになります。そうすることで、フィリピンの学生とのコミュニケーションが良好となり、結果として楽しみながら活動に取り組むことができます。

ポイント1

間違いを恐れず英語を話すことができ、互いに認め合い、学び合える学習環境づくりを前提として活動をしします。フィリピンの学生が知りたい日本文化の内容及び、表現を深めるために、自分の考えを整理していく段階で、ペアやグループで練り合いを重ね、伝えたいことを決定していきます。また、オンラインでの会話を文に書き出し、文法や言語使用の間違いを修正し合います。

正しい発音で話しているかは、AI機能も使いながら、相手にとってより分かりやすい英語に近づけていきます。

ポイント2

教師が作成したモデル会話を聞く、モデル英文を読むことで、文の構成や会話量、記述量の見通しをもてます。また、相手の知りたい日本文化をより詳しく説明するためには、自身の正しい日本文化の理解や、関係代名詞節の使い方などが必要となり、それらの身に付けなければならない知識・技能の必要性に気付くことが、主体的に学ぶ動機となります。

教師、生徒間の適切なフィードバックで学びを調整することが生徒の深い学びとなると共に、フィリピンの学生との交流の中で、自分の伝えたいことが実際に伝わった喜びが達成感となり、次の学びにつながります。

ポイント3

研究会

学びの技法を用いた公開授業を研究推進委員のメンバーで参観し合い、教員同士の学び合いを次の授業に生かします。



英語 <新潟地区／新潟市中教研>

11月6日(木) 研究会開催

研究主題：つながりのある言語活動の中で、表現を広げ、
学びを深めていく生徒の育成

単元名：「3年：Lesson 5 Translating Culture」

会場校：新潟市立亀田西中学校

公開：1学級

授業者：砂井 友朗

指導者：新潟市教育委員会学校支援課

指導主事 齋藤 まゆみ 様

新潟市立総合教育センター

指導主事 佐藤 優子 様



研究推進責任者
新潟市立寄居中学校
風間 皓介



教科・領域担当者
新潟市立亀田西中学校
砂井 友朗

こんな深い学びの姿を目指します

当英語部がこれまでの研究で積み重ねてきた「主体的・対話的な学び」を「深い学び」へとさらに発展させるため、各活動を単元末の課題につながるよう構成します。これにより、生徒たちは明確なゴールを意識しながら、個々の活動の必要性を感じ、表現の幅を広げ、学びを深めていくことを期待しています。

主な手立て（『学習過程』と『深い学びの技法』の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→『深い学びの技法』のNo.1）

教科書の題材、単元末課題等について、興味関心を高めたり、自分の経験との関連性を持たせる（知識の関連付け）

これにより、生徒は教科書本文や単元末課題を身近に感じたり、自分事として捉えたりすることで、主体的、意欲的に学習に取り組むようになります。

ポイント2（思考の過程→『深い学びの技法』のNo.8）

獲得した知識・技能を活用し、生徒同士で発表したり、やり取りしたりする（知識の活性化）

これにより、学習した文法項目や教科書本文等の知識・技能が定着し、それらを用いた表現活動ができるようになります。

ポイント3（表現の過程→『深い学びの技法』のNo.15）

単元末課題等に向け、自分の考えを発表したり、やり取りをしながら、考えを広げ、深めていく（探究）

これにより、生徒は獲得した知識・技能を活用しながら、「深い学び」を実現していくようになります。

単元(題材)の様子

新潟市中教研英語部は、部員数が150名を超えるため、東西2ブロックに分かれて公開授業を行なっています。以下に紹介するのは、昨年11月に1年次の研究として公開授業を行なった高志中等教育学校と小須戸中学校での公開授業の様子です。

ポイント2・3

高志中等教育学校では、3年生『Lesson 6 Imagine to Act』を題材に、全13時間中12時間目の授業を公開しました。

単元末課題を「If you could get a superpower, what would you get?」とし、仮定法過去を用いて自分の考えや気持ちを書く活動を設定しました。

前時まで、生徒はマインドマップ等を用い、事前準備を進めてきました。研究会では、それらを用いて英語を書く活動を行い、その後、ペアで伝え合う活動を行いました。

指導案を構想する段階で、「生徒たちが伝えたいと感じるテーマは何か」について何度も議論を重ねた結果、当日は自分の考えや気持ちを伝えたい、知りたいと意欲的に書いたり、聞き合ったりする姿が見られました。



ポイント1・2

小須戸中学校では、3年生『Lesson 5 I Have a Dream』を題材に、全9時間中2時間目の授業を公開しました。

1時間目に、単元の目標「国際交流イベントで、自分の住んでいる町や文化について効果的にアピールするにはどうしたらよいだろうか」を提示し、単元のゴールを生徒と共有しました。

研究会では、関係代名詞を含む文を用いて、グループごとに異なる小須戸の町や文化についてALTに対して即興で説明する活動を行いました。

明確な場面・目的・状況を設定したことにより、生徒たちは悩みながらも、互いに意見を出し合い、関係代名詞を用いて、何とかALTに自分たちの住む地域のことを伝えようと、主体的に活動に取り組んでいました。



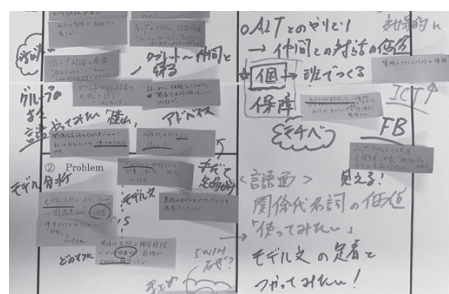
研究会

ポイント3

研究会では、『Lesson 5 Translating Culture』を題材に、英語でやり取りをする授業を公開します。

ALTからの要望に対して、生徒一人ひとりが選択した『日本のおすすめの○○』を伝える単元末課題に向けて、単元を通してやり取りの質と量を段階的に高めたり、増やしたりしていきます。公開授業では、これまでに培った生き生きとしたやり取りの様子をぜひご覧ください。

協議会では、KPT法を用いた授業研究に加え、参加者が持ち寄った「深い学び」や、今年度改訂された教科書を活用した実践について協議します。昨年度の一斉研修(右写真)のように、今年度も公開授業での生徒の姿をもとに、実りある活発な議論が展開されることを心より期待しております。



英語 <下越地区／佐渡市中教研>

11月14日(金) 研究会開催

研究主題：深い学びにいたる授業

～「深い学びの技法」を基に、生徒が自身のよさや可能性を伸ばしていく学びを通して～

単 元 名：「3年：Lesson6 Being Fair Project2 30秒CM」

会 場 校：佐渡市立相川中学校

公 開：1学級

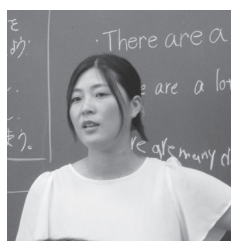
授 業 者：安田 夏怜

指 導 者：新潟県立教育センター 指導主事 袖山 司 様

佐渡市教育委員会 指導主事 源田 洋平 様



研究推進責任者
佐渡市立両津中学校
小黒 淳一



教科・領域担当者
佐渡市立相川中学校
安田 夏怜

こんな深い学びの姿を目指します

生徒たちが、自分事として見方・考え方を働かせ、興味・関心と目的意識をもちながら学びを深め、表現しようとする姿を目指します。他教科の学習と関連させた単元を構想し、積み重ねた既習の知識や技能を活用して、活発に思考し表現しながら仲間と練り合いや練り上げをすることで、生徒自らがこだわりをもってより良い発表内容を追求していくことを期待します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）

単元末課題について、学んだ知識や他教科の活動をもとに興味・関心のある視点を選んで思考し、表現する。

これにより、題材や課題が生徒の身近なものになり、自分事として考え、表現しようとするようになります。

ポイント2（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

毎時間、単元ゴールに向けて自己表現活動を取り入れ、学びを積み重ねる。

これにより、生徒は繰り返し思考や表現をするため、知識や技能の定着と活用が図られるようになります。

ポイント3（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

自分が表現したものを、言語面や内容面の観点から生徒同士や教師との間で練り合いや練り上げをする。

これにより、生徒たちの中で学び合いが機能し、より良い表現を目指して再考し、改善するようになります。

単元(題材)の様子

今回、総合的な学習の時間「SDGsとまちづくり～世界遺産のまち相川～」の学習と関連させて単元を構成します。まちづくりに「Fairness(公平さ)」は重要な要素と捉え、その上で自分が興味・関心があるまちづくりの視点を選び、様々な国の人に相川を知って大切にしてもらうための30秒CMを作成する活動を展開します。



ポイント1

Lesson5 I Have a Dream

◎人権問題に立ち向かった人の考えや行動を参考にして、身近な社会でみんなが気持ちよく暮らせるために自分にできることを英語で宣言しよう。

宣言文に書いている内容を分析しよう。



I think that women and girls don't have equal rights.
In my home country of Pakistan, many girls and women can't go to school. In 2012, I was shot in her home country of Pakistan. Because I was against the Taliban crackdown on women's education. I can fight for people's right to equal education.
I hope that all women and girls have education.

マラクさんは宣言文にどんなことを書いている？

ポイント2

1年次は、「人権」をテーマとし、道徳や人権教育、同和教育と関連させて授業を行いました。今回は、総合的な学習の時間の活動と関連させて単元を構成します。毎時間の英語授業では、自己表現活動を設定し、知識や技能の定着と蓄積を図ります。また、英語授業にとどまらず、総合的な学習の時間に得た知識や考えも活用し、まちづくりのアイデアを練ったり英語で表現したりします。これにより、英語と他教科の双方の知識や技能が生かされ、自分の意見や考えを形成し、表現することができると考えます。

1年次は、「人権」をテーマに自分の意見を書くという単元末課題に向けて、学習モデルを用いながら蓄積した表現を活用し、同じテーマを選んだ仲間と集まって練り合ったり練り上げたりしました。しかし、テーマが「人権」ということで表現が難しく、生徒同士の練り合いがうまく働きませんでした。生徒同士の練り合いに加え、教師とのやり取りも踏まえた「中間指導の工夫」が課題だと感じました。そこで今回は、練り合い・練り上げのタイミングや回数、観点や内容を工夫します。これにより、自分の意見や考えを再構築し、より適切に表現するコミュニケーション力を高めます。



ポイント3

研究会

研究会では、『Project2 30秒CM』を題材に、『Lesson6 Being Fair』で学習した関係代名詞や「Fairness(公平)」について考えたことを基に、生徒一人一人が作成した「相川を知って大切にしてもらうためのCM」の原稿や発表を生徒同士、または生徒と教師で練り合う授業を公開します。

総合的な学習の時間で考えたことや単元を通して積み重ねた知識や技能を活用して、内容面と言語面から練り合い、より良いものを創り上げていこうとする姿をご覧ください。

公開授業後の全体会では、研究の概要説明、ワールドカフェ形式による公開授業や「深い学び」の実践についての協議、指導者による助言、「私の一步」を考える振り返りを行います。生徒が生き生きと学ぶ授業を目指して、一緒に考えましょう。



音楽

感覚的な印象を、より確かなものへ ～音楽的根拠に基づいた深い学び～

音楽の解釈や表現において、「何となく…」という感覚的で曖昧な印象に留めることなく、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせ、根拠に基づいて判断・評価・表現できる深い学びの姿を目指します。

感覚と根拠の往還を核とした学習課程に着目し、多様な音楽体験と対話、試行錯誤の機会を通じて、生徒が音楽を多角的に捉え、自らの解釈や表現を深めていきます。

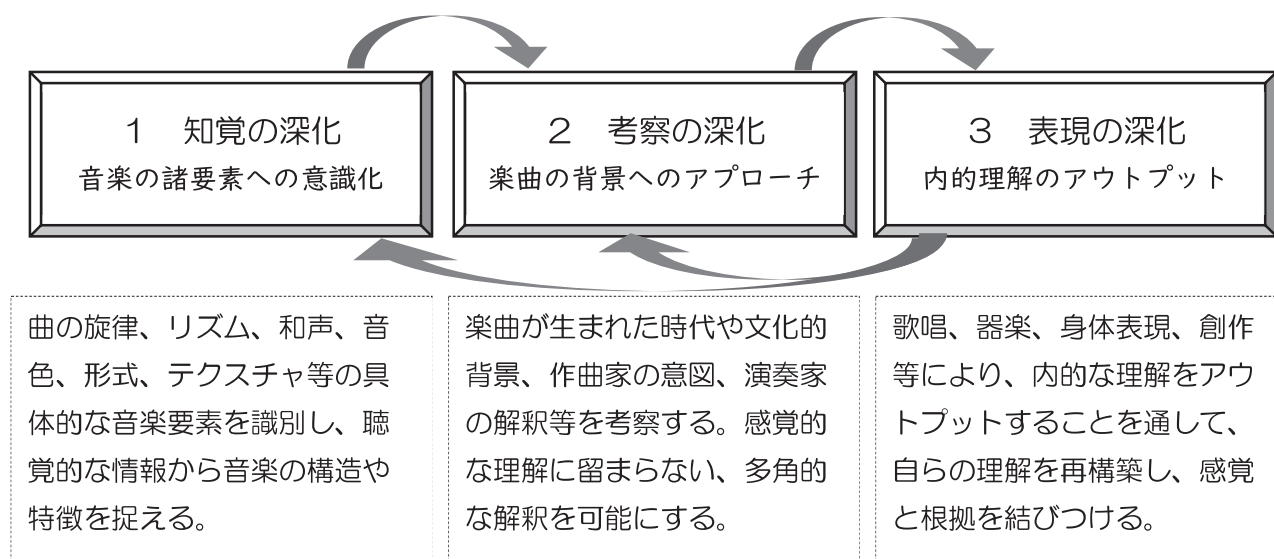


県中教研 音楽部 全県部長
新潟市立中之口中学校

校長 藤井 章

「音楽的な見方・考え方」を働かせる力を育む往還学習

「音楽的な見方・考え方」とは、音楽を単なる音の羅列としてではなく、構成要素、背景、表現意図などの多様な視点から統合的に捉えて読み解き、自分の思いや、生活や社会、伝統文化等と関連付ける力と言えます。この力を育成するためには、以下の3つの視点において、幅広い領域・分野にわたって、長期的な視野での往還学習が求められます。これを、深い学びの20の技法と関連付けていくことが重要な視点です。



感覚 ⇄ 根拠、個別 ⇄ 全体、思考 ⇄ 表現【往還と価値づけ】

授業者はファシリテーターとして生徒の思考を促し、気付きや発想を価値づけ、対話を支援します。多角的な活動を展開する中で、生徒が音楽を通して論理的な思考力と豊かな感性を統合し、生涯にわたって音楽を豊かに享受し、創造・発信していくための資質・能力を育むことを目指します。

指定研究 1 年次の実践から

【上越地区：柏崎市・刈羽郡中教研】

上越地区は、柏崎市立北条中学校を会場に行いました。2年生10名という少人数ながら、生徒たちが楽譜から読み取った根拠をもとに、対話しながらよりよい歌唱表現を追求しました。

2年次では、そうした自分の思いや感じ取ったことを言語化する力をさらに高め、協働して音楽を練り上げていくとともに、音を磨く過程（発声・発音の工夫、音の処理の仕方、正確な音高・音価）にも着目させながら、「音楽的な自立」を目指して取り組む成果を発表します。



【新潟地区：新潟市中教研】

新潟地区は、指定研究1年次と2年次で会場校・授業者を変えて取り組んでおり、1年次は新潟市立鳥屋野中学校を会場に、今井優太教諭による授業を行いました。

深い学びの20の技法から、③⑤⑬を選択し、自校のCMソングを創作しました。アプリGarage Bandの活用と併せて、課題提示で導入した創作条件の提示によって、活動への意欲喚起や取り組み易さにつながる工夫・配慮がなされていたこと、グループ活動で生徒同士が様々な価値観に触れて考えを深めたり、生徒の気づきを的確に取り上げて価値づけていた授業者の姿が印象的な実践でした。



音楽 重点方針

生涯にわたって音楽に親しむ生徒を育てる。

- 音楽のよさを感じ、伝え、関わり合いながら学び、考える授業を展開する。
- 音楽を形づくっている要素を支えとして、思いや意図をもって表現する生徒を育てる。

音楽 <上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研>

11月28日(金) 研究会開催

研究主題：深い学びにいたる、豊かな音楽性を育む授業
～生徒の音楽的な自立を目指して～

題 材 名：「3年：わたしたちの表現を追求しよう」

会 場 校：柏崎市立北条中学校

公 開：1学級

授 業 者：小林 良輔

指 導 者：新潟大学名誉教授 伊野 義博 様



研究推進責任者
柏崎市立東中学校
安中 美香



教科・領域担当者
柏崎市立北条中学校
小林 良輔

こんな深い学びの姿を目指します

生徒が自分のよさや、これまでに培われた音楽性を発揮し、音楽的な自立に向かうことを深い学びの姿とし、音楽的な資質の向上と生徒一人一人が輝く授業づくりの具体化を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.16） 解決の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

教師の視点を概念化・言語化し、学んだ知識や技能とともに活用して、自分たちの視点で歌唱表現を追求する。

生徒は、教師の視点や既習の知識・技能を手掛かりに、自分に内生した感覚や気づきが何であるかを明らかにし、活用できるツールとして具体化することで、自分たちの視点で歌唱表現を追求するようになります。

ポイント2（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.11）

楽譜から深く読み取ったことと実際の音や音楽から感じ取ったこととを関連付けて表現する。

生徒は楽譜からの読み取りと、実際の音から感じ取ったことを関連付け、音楽的な根拠をもって表現するようになります。

ポイント3（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

仲間と協働して、一人一人の思いに基づく表現をすり合わせて、新しい表現を創り上げる。

生徒は、自分の意図を音にして歌ったり、身体表現を伴ったりして、交流しながら、音楽を練り上げるようになります。

単元(題材)の様子

表現の練り上げの過程において、生徒に内生した感覚や気付きが何であるのかを明らかにする手立てとして、「教師が何に注目していたのか」を概念化・言語化(意味を考える・それらを関連付ける・身体で表現する等)し活用のモデルとします。生徒はこれを用いて、「自分たちは何に注目するのか」を考え、「音楽的な自立」を促します。

ポイント1



1 年次公開授業の様子

概念化・言語化された感覚や気付きと、既習曲で学んできた知識(音楽を形づくっている要素・アーティキュレーション等)やそれらを表現するための技能(発声方法・体の使い方・ソルフェージュ等)とともに活用して、歌唱表現を追求するようになります。

ポイント1



楽譜から深く読み取ったことを実際の音や音楽から感じ取ったことと関連付けて表現します。

これにより、楽譜から深く読み取ったことと、実際に歌う中で「こうしたい」の思いを関連付け、音楽的な根拠をもって表現するようになります。

ポイント2



1 年次公開授業の様子

仲間と協働して、一人一人の思いに基づく表現をすり合わせて、新しい表現を創り上げます。

これにより、自分の意図を音で表現・言語化・身体化し、仲間と試行、模倣、意図する表現をするための技能について選択、共有して、より深い音楽表現を追求するようになります。

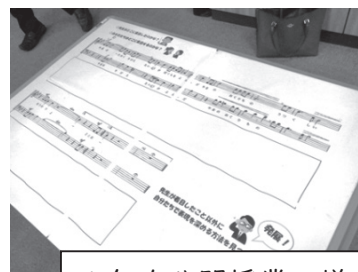
ポイント3



研究会

研究会当日は、「表現の創意工夫」として、協働して合唱曲を練り上げていく様子をご覧ください予定です。

- ①楽譜から読み取ったことや音から感じ取ったことをワークシートにまとめて、具体的な表現活動につなげます。
- ②音や身体表現を伴った交流活動を行います。
- ③「概念化(意味を考える・それらを関連付ける・身体で表現する等)した学んだ知識・技能」を用いて、試行を行います。
- ④交流と試行を繰り返しながら、合唱表現を練り上げていきます。



1 年次公開授業の様子



ポイント1・2・3

音楽 <新潟地区／新潟市中教研>

11月6日(木) 研究会開催

研究主題：感性を働かせて、仲間と共に
音楽に関わり続ける生徒の育成

題 材 名：「3年：“根拠”を明らかにして鑑賞しよう」
連作交響詩「わが祖国」から
ブルタバ（モルダウ）

会 場 校：新潟市立新津第一中学校

公 開：1学級

授 業 者：和田 卓之

指 導 者：新潟青陵高等学校 副校長 高橋 恒彦 様



研究推進責任者
新潟市立木戸中学校
関 裕子



教科・領域担当者
新潟市立新津第一中学校
和田 卓之

こんな深い学びの姿を目指します

習得・活用・探求という学びの過程の中で、仲間との関わりを通して音楽表現を追求していく生徒の姿を目指します。

本研究では①「見方・考え方」を深める資料を準備・提示し、その中から生徒が選択応用しながら、自ら習得した知識を深める姿 ②音楽の構成や仕組みを音楽の背景などに関わらせて考え、自分の言葉でまとめることができる姿を目指しています。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）

視点・観点・論点を具体的に設定し、自立した思考や表現につなげる。

生徒は、学びの方向性をしっかりと定めることができ、「進んで学びたい」と自立した学びへとつなげます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.5）

仲間と協働し、資料やデータに基づいて考察したり、検証したりする活動を組織する。

生徒は、複数の資料やデータから必要なものを選択・応用し、自ら課題解決に近づこうとするようになります。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.13）

学びを表現する場面で理由や根拠を示すことを意識させることで、論理的な思考を促す。

生徒は、物事の道筋や考え方が明確になり自らの言葉で学んだことを整理し、まとめることができるようになります。

単元(題材)について

連作交響詩「わが祖国」は、6つのチェコの自然や伝説に基づく6つの交響詩で構成された作品で、「ブルタバ」(モルダウ)はこの作品の一つです。

「ブルタバ」(モルダウ)は、チェコを流れる川の源流から市内へと続く川の情景がオーケストラの豊かな響きで描写されており、聴き手の想像が広がります。その情景を音楽のどの要素から裏付けされているのかを分析しながら聴くことで、根拠をもって曲想を感じることができます。

今回は、総譜(スコア)を用いることで、その根拠の論理性を強めることを目指します。

単元(題材)の様子

ポイント1

課題設定の場面において、「何を考えればいいのか」「どのような手順で考えればいいのか」「どのような視点で考えればいいのか」を分かりやすく提示します。

学びの方向性を分かりやすく示すことで、自立した学びを促すとともに、音楽が苦手だと感じている生徒にも「進んで学びたい」という意欲をもたせます。

ポイント2

複数の資料やデータを提示し、生徒はそこから課題解決のために必要なものを自ら選択し、応用します。

生徒は様々な資料やデータに基づいた考察や検証をすることで「見方・考え方」を働かせ、課題解決に近づくことができます。

また、仲間と協働して行うことで、様々な価値観にふれることができ、さらに深い学びにつながります。

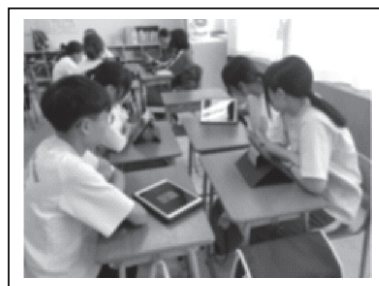


ポイント3

学んだことを整理し、まとめる場面を設けます。その際、理由や根拠を示すことを意識させ、物事の道筋や考え方をはっきりさせる論理的な思考を促します。

物事の道筋や考え方が明確になることで、生徒は自らの言葉で学んだことを整理し、まとめることができますようになります。

また、仲間との音楽活動を通して様々な意見や感想、評価を得ることで自らの思いや意図を論理的に表現する力を伸ばし、聴き手に伝わる表現力が向上します。



研究会

当日は現地参観とzoomをつないで授業を公開します。授業実践を共有できるように事前に指導案・ワークシートを送ります。可能であれば事前に授業で実践してみてください。

「ブルタバ」の聴き取りを深める手立てとして、「オーケストラスコアの活用」「仲間との音楽活動の関わり」が有効だったかを参観のポイントとして授業を見ていただき、その後の協議会で意見交換します。

保健体育

豊かなスポーツライフを実現するための 深い学びにいたる授業づくり

保健体育科では、生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、スポーツとの多様な関わり方を場面に応じて選択し、実践することができる資質・能力の育成が求められています。

運動との出会いや技能の高まりを実感でき、運動を通して自らの思いや願いを表現できる授業づくりを目指しています。



県中教研 保健体育部 全県部長
見附市立今町中学校

校長 北山 智博

保健体育科で育成したい資質・能力と体育の「見方・考え方」

保健体育科の目標は、体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指すものであると示されています。また、「体育や保健の見方・考え方を働かせる」ことを通して、「保健体育科においては、各種の運動がもたらす体の健康への効果はもとより、心の健康も運動と密接に関連している」ことを実感させ、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育むことが大切であることを強調したものです。

体育の「見方・考え方」は『運動やスポーツを、その価値（公正、協力、責任、参画等）や特性（技能、ルール、魅力等）に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること』とあり、まず運動やスポーツの価値や特性とは何かを明確にする必要があります。そして「価値的な見方・考え方」と「特性的な見方・考え方」を交互に働かせたり、関連付けたりしながら運動やスポーツを実践できるよう単元（授業）を構成することが大切になります。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の流れ（例）

つかむ

目標（目指す姿）を理解する
技術ポイントを理解する

深める

個人で課題を追究する
仲間と協力して課題を追究する

まとめる

自己の変容や課題を明らかにする
次時の見通しをもつ

深い学びにいたる、客観的視点からの技能ポイントの気付きと、R-PDCAサイクルを活用して生徒の良さを引き出す授業実践

長岡市立秋葉中学校の実践では、自己の動作を客観視することで課題を見付け、自己にあった行動を考えることで「わかる」と「できる」をつなぐ授業に取り組みました。自己を客観視するためのポイントや客観的に自己分析するための動画やデータを活用しながら、よりよい動作への改善を図り、「深い学びの姿」を目指しました。球技の学習過程において、得点するためには個人技能の習得だけでなくチームプレイが必要になります。チーム内で自分の役割を果たそうとする姿が深い学びにつながると考えます。

聖籠町立聖籠中学校の実践では、生徒の特性等に応じた「する・みる・支える・知る」といった多様な関りを通して生徒の良さを引き出す授業実践を行ってきました。課題を言語化する姿や、R-PDCAサイクルを通して課題解決に主体的に取り組む姿を目指しました。生徒が主体的に「深い学び」へと向かうために、教師の「問い」が重要になります。「マット運動」の実践で、生徒の多様な関り方と関連付けた各時間の「問い」を組み合わせることが「深い学びの姿」に迫るのではないかと考えます。

「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善

主体的な学びの視点からの授業改善では、生徒の興味・関心を喚起しているかどうか大切です。教材や教具、場やルール等の工夫により生徒の主体性を引き出すことにつながります。

2つ目は学習の見通しを明示することです。生徒が見通しをもつことで、意欲につながります。

3つ目は課題とその解決のための活動を明確にすることです。課題が明確であったか、それを解決するための活動が十分に保障されていたかどうかという視点で授業改善を図ります。

対話的な学びのための授業改善の視点としてまずは「見る」ということです。教え合うにも励まし合うにも見てないとできません。他人事を自分事にすることで対話が生まれます。また、見る視点(ポイント)を明確にするため、教師から積極的に言葉掛けをしたり、ICTを

活用したり、ボディランゲージ、オノマトペといった体育ならではの対話も効果的です。

深い学びという視点で授業改善を考えると1つ目は、多様な課題や活動をしっかりと保証しているかどうかです。生徒は易しい課題を繰り返しているだけだと飽きてしまいます。生徒は試行錯誤を繰り返すことで、課題を解決したり新たな課題に出会ったりします。その瞬間こそ、深い学びの一つの場面と考えます。

2つ目は、生徒の思考に深まりが見られているかという視点で授業を考えることです。何となく課題を出して、活動を変えていくだけでは深い学びにはなりません。生徒自身が自分なりに思考を深めていく活動があったときに、深い学びが現れるのではないかと考えます。

3つ目は、見方・考え方に関わってきます。体育や保健の見方・考え方を働かせているかどうかという視点で授業を改善することが大切です。

保健体育 重点方針

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、明るく豊かなスポーツライフを実現する資質能力を育てる。

- 生徒の実態把握の充実
- 保健体育の見方・考え方を働かせることを意識した授業
- 学習過程、単元構成の見直し、工夫及び指導と評価の一体化の工夫、充実
- 楽しい授業、UDLの推進
- 個に応じた運動量の確保と体力の向上

保健体育 <中越地区／長岡市・三島郡中教研>

10月22日(水) 研究会開催

研究主題：自己を客観的に捉え、課題解決に向けて深い
学びにいたる授業の工夫

単 元 名：「3年：球技（バレーボール）」

会 場 校：長岡市立秋葉中学校

公 開：1学級

授 業 者：早川 菜津美

指 導 者：新潟大学教育学部 准教授 檜皮 貴子 様



研究推進責任者
長岡市立西中学校
平川 剛志



教科・領域担当者
長岡市立秋葉中学校
早川 菜津美

こんな深い学びの姿を目指します

保健体育科として目指す深い学びの姿とは、『自分（たち）の動作を客観視しながら課題を見付け、自分（たち）にあった行動を考える姿』と捉えます。「わかる」と「できる」をつなげるために深く考える姿を目指します。しかし、保健体育科においては、考えるだけでなく、技能を習得する、技能を高める活動も必要不可欠です。そこで、主観だけでなく、客観的な視点から技能のポイントに気付き、練習を工夫しながら、技能を高めたり身に付けたり努力する姿を大切にします。

主な手立て（『学習過程』と『深い学びの技法』の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→『深い学びの技法』のNo.3）

生徒の「わかる」と「できる」をつなげるために、客観的に自己評価を行うことのできる視点を設定する。

これにより、生徒は自己を客観的に見るポイントに気付き、自己の動きをより細かく分析できるようになります。

ポイント2（思考の過程→『深い学びの技法』のNo.9・10）

動作を個人やグループで客観的に分析し、話し合いながら技能の向上を目指す活動を組織する。

これにより、生徒は自己の動作を客観的に分析し、課題解決に向けて練習に主体的に取り組むようになります。

ポイント3（表現の過程→『深い学びの技法』のNo.13）

「できる」と「わかる」をつなげるための根拠を見付け、言葉で表現する。

これにより、生徒は動画等を活用しながら、客観的なデータをもとに自己分析をし、動作を改善できるようになります。

単元(題材)の様子

バレーボールでよりよい三段攻撃ができるように工夫をして授業を展開します。その際、客観的に自己(自チーム)の分析ができるよう、ポイントを示します。

これにより、客観的に、より細かく、自己(自チーム)の動作を振り返ることができます。

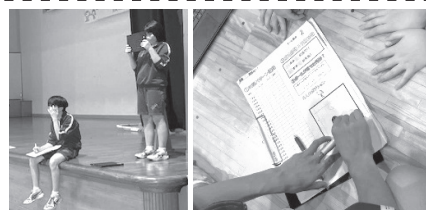
ポイント1



三段攻撃の成功率や三段攻撃時のボールの軌道、遅延カメラでの動画など、細かいデータをとることで、客観的な視点から自己(自チーム)の動作を分析できるようにします。

練習中に遅延カメラ(7秒に設定)で自己(自チーム)の動作をすぐに確認し、お互いに課題を即座に確認し合いながら活動することで、深い思考をもとに、課題の解決に向けて主体的に練習に参加できるようになります。

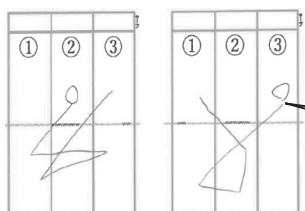
ポイント2



ワークシートにボールの軌道を記すことで、成功した部分と課題の残る部分を確認することができます。

これにより、どのようにミスをしたかが振り返りやすくなり、成功につなげるためにポイントを確認しやすくなります。

ポイント2



振り返りの時間を確保し、グループで課題の確認と振り返りをします。

これにより、グループで課題を解決するためにどう動けばよいかを考える力を育成します。

ポイント3

生徒が記した三段攻撃時のボールの軌道(プレ授業より)

研究会

研究会では、“客観視の可能性”“客観視のためのツールの有効性”“深い学びの姿”の3つの視点から協議を行う予定です。実際の生徒の姿から考えていきます。

また、深い学びにいたるために授業をどのように工夫すればよいかを考えていきます。

ポイント1・2・3

①攻撃練習記録

	サブエリア	レシーブ	トス	アタック	成功(サブエリア以外のところに打った)
1本目	③			×	
2本目	③			×	
3本目	⑤		×		
4本目	⑦			○	×
5本目	②		×		
6本目	①	×			
7本目	②			○	○
8本目	③			○	○



深い学びにいたるための授業の流れとその工夫(客観的に捉えるために)

目標設定 前時の振り返りから

挑戦 遅延カメラを活用

振り返り課題確認 ワークシートに記載したデータを活用

挑戦 遅延カメラを活用

保健体育科としての深い学びの姿を目指し、単元や種目の特性に応じた授業を工夫します。今回はバレーボールで三段攻撃のルールを工夫し、様々なツールを駆使して、深い学びにいたるための授業を展開します。

保健体育 <下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研>

11月20日(木) 研究会開催

研究主題：深い学びの技法を用いて生徒の良さを引き出す
授業実践

～生徒が主体的に学び合う授業を通して～

単元名：「2年：器械運動（マット運動）」

会場校：聖籠町立聖籠中学校

公開：1学級

授業者：小竹 武志

指導者：村上市教育委員会 学校教育課

指導主事 只木 雅実 様



研究推進責任者
胎内市立黒川中学校
菅原 久代



教科・領域担当者
聖籠町立聖籠中学校
小竹 武志

こんな深い学びの姿を目指します

生涯にわたる豊かなスポーツライフ実現の観点から、運動の得意・不得意に関係なく、生徒の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様なかわりを通して生徒の良さを引き出すための授業実践を行います。

本研究では、①比較・対話を通じて自他の課題を言語化する姿、②課題解決を目指しR-PDCAサイクルを活用して実践していく姿を目指しています。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.4）

見本の動画との比較から、自他の課題を発見し、課題解決のための方策を設定する。

授業の中でR-PDCAサイクルを繰り返すことで、課題解決に向けて主体的に学習に取り組むようになります。

ポイント2（思考・表現の過程→「深い学びの技法」のNo.5・13）

資料やデータに基づいて、自他の動作を検証し、その理由や根拠を示して論理的に説明する。

これにより、生徒は客観的な資料をもとに比較・対話し、自他の課題を言語化できるようになります。

ポイント3（評価の過程→「深い学びの技法」のNo.18）

自己の学習の過程を振り返ることにより、授業を通じて身に付けた資質・能力をメタ認知し成長につなげる。

これにより、生徒は自己の活動を客観視し、次時にむけて「より良い」改善方法を見つけることができるようになります。

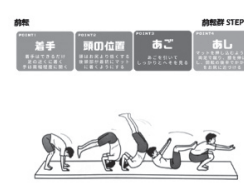
単元(題材)の様子

マット運動における発表場面を「グループ演技」とし、技能の習得段階においても、グループ学習を進めます。自他の課題を見本の動画と見比べながら発見し、課題解決のための方策を考えます。また、動画の「視点づくり」の授業を行い、生徒自身が見るポイントを実習できるようにします。

ポイントが分かるような動画・学習カードを使用することにより、生徒が「視点」をもって課題を発見し、主体的に学習に取り組むようになります。



↑視点づくりの動画



※課題解決の動画 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿



↑各技の見本動画の作成



ポイント1

動画・学習カードに基づいて、生徒が自他の技を視点をもって客観的に観察し、「どこがどうできていないか」を捉え、言語化して説明するための時間を設定する。

授業内で全体に設定されている『分析タイム』と、個人の技の習得に合否判定をする『STEP UPタイム』を設定することにより、生徒は具体的な改善点に対する手立てを設定できるようになります。

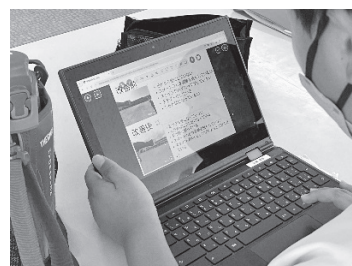


ポイント2

振り返りの時間を設け、その時間のはじめに撮影した技の動画と、最後に撮影した技の動画を見比べ、変容を見取ります。また、設定した自己の課題解決のための方策が、課題解決に有効だったかを振り返ります。

自己の活動をメタ認知することにより、次時に向けてより良い改善方法を見つけることができます。

ポイント3



研究会

ポイント1・2・3

研究会当日は、倒立群の技の習得において授業を行う予定です。

倒立前転の習得を基本とし、側方倒立回転や前方倒立回転跳びなど、自己の課題に合わせてグループで学習を行います。『分析タイム』『STEP UPタイム』を通して、比較・対話の中から課題を言語化し、課題解決に向けての方策を実践する姿を目指します。

協議会では、【深い学びの姿】、【目指す姿実現のための手立ての有効性】に関して協議を行う予定です。



↑昨年度プレ授業の様子

↓集団演技の見本動画の撮影の様子



昨年度より『「深い学び」にいたる授業』を研究主題として取り組み、生徒の良さを引き出す授業実践を行ってきました。今年度、見本動画や学習カードに技の「視点」を分かりやすく入れ、生徒が主体的に取り組み、深い学びの姿が見られる授業を行います。

学校保健

自分の心と体を見つめ、仲間と学び合いながら 健康課題の解決を目指す授業づくり

生涯にわたり、健康で自分らしく人生を送ってほしい。そのために、今、何を学び、経験することが必要なのだろうか。養護教諭として生徒の育ちを見つめ、そこから見えてきた健康課題をもとに、個や集団の強みを生かした授業展開について追究してきました。生徒が、仲間とかかわり合い、学び合う姿を目指した健康教育を提案します。



県中教研 学校保健部 全県部長
十日町市立吉田中学校

養護教諭 高橋 妙子

健康教育こそ「深い学びにいたる」授業実践を

私が中学生だった平成初期と比較すると、子どもの生活環境は様変わりしました。とりわけ、メディア機器の進化と普及により、全世界の人々とつながれるようになり、あらゆる情報が容易に手に入るようになりました。それにより、人生における選択の幅が広がり、生活が便利で豊かになった一方、心身の健康問題が深刻になっている実情も否めません。さらに、子どもたちが生きる未来も、急激に変化し、予測困難な時代となるといわれています。そうした時代に、健康で、自分らしく生きていくために、命や健康への価値を見だし、心身の健康や健康的な生活について主体的に学び、思考し、判断し、表現・行動していく力を育むことが欠かせません。

とはいえ、健康に“今”を生きる中学生に、健康の大切さを説いても、自分事にはなり得ません。ましてや、生活習慣を改善したり、他者とかかわり方を変えたりするといった行動変容にまでは、とうてい辿り着かないものと思います。生徒の思いを聞くといつも、

相田みつをさんの「人間だもの」という言葉が脳裏に浮かびます。正論や机上の正解にのみ価値をおいては、生徒が主体的に、学びを深める健康教育になりにくいのが現状です。

では、健康教育で目指すべき「深い学び」とは、どのようなことなのでしょう。学習指導要領¹⁾では、保健分野における深い学びの鍵として、保健の見方・考え方を働かせることが、具体的に示されています。それに向けて、「自他の健康についての課題を発見し、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決する学びの過程」²⁾を繰り返すことにより、保健の見方・考え方を豊かで確かなものにすることが大切です。したがって、これからは、自他の命や健康の価値を見だし、あふれた情報を吟味しながら行動選択することを目指した健康教育が求められ、それには、生徒同士がかかわり合い、学び合う学習過程に着目した授業実践が重要だと考えます。

深い学びにいたる授業を目指した3つのキーワード

■自分事 ■対話 ■振り返り

■「自分事」として学ぶ

保健の授業を行うと、学んだ知識やスキルが、生徒の実際の生活場面に生かされにくいという課題に直面します。授業での学びと実際の生活を結び付けるために、授業内容を自分自身と関連させて、より現実に近い学習過程が必要です。今回は、深い学びにいたる授業を実現するために、題材を自分事として捉えるための手立てを工夫しました。新潟地区では、ヘルスリテラシーの活用力である「意思決定スキル」を向上させるために、生徒にとって身近な健康課題である「睡眠習慣」に焦点を当てました。上越地区では、生徒が自分の表現方法について吟味できるように、日常生活によくある葛藤場面を提示します。生徒が題材をどのように受け止めて、学びに向かうのかについてご注目ください。

■「対話」を通して学びを深める

1年次の研究授業で、話し合いの場面において、生徒の意見や思いが“紹介・発表”されるにとどまり、深い学びにいたる対話としては不十分ではないかという課題が、両地区ともに出されました。佐伯によれば、「対話しつつ考えが深まり、考えを深めつつ対話し、また、対話を超えるものへと広がりが高まりをもつ」³⁾とし、学びの広がりや高まりに対話は欠かせません。またこれは、他者との対話だけでなく、自分自身を見つめる自己内対話との相互作用により、学びが深まることを意味しています。こうした対話を実現するためには、生徒が自分のもっている前提や無自覚に気付いたり、他の異なる意見や価値観に触れたり、それにより感動や葛藤といった心の揺れ動きが生じたりすることが重要であり、そしてそれを、自分なりに言語化しようと努力することが必要だと考えます。研究推進委員会では、両地区ともに、対話が生まれる必然性のある学習上の「問い」について議論を重ねてきました。また、授業展開では、自己内対話場面と他者との対話場面を意図して組み立てています。対話により、生徒が自分の意見や思いを相対化しつつ吟味し、課題の本質に迫っていく過程になっているかご注目ください。

■学びをたしかめる「振り返り」

授業における学びを充実させるために、振り返りは欠かせません。振り返りについて田村は、文章を書いて振り返ることの重要性⁴⁾を指摘しています。それは、「自らの学びを丁寧に見つめ直し、そこでの様々な情報としての知識を関連付けて、自分の既存の知識の構造に新たな知識を組み込んでいくから」⁴⁾であり、そこには生徒の熟考が生まれるのです。両地区の授業実践でも、終末に振り返りを記述する活動を設定します。これまでの学習で得た知識や気付き、変容などを関連付けながら熟考し、これからの生活や生き方につなげることをねらいとしています。授業のまとめと、振り返りの観点が、生徒の熟考につながるものであるか、参観の視点としていただければと思います。

<引用文献>

- 1) 文部科学省：【保健体育編】中学校学習指導要領（平成29年告示）解説、2017
- 2) 大津一義、山田浩平：5 保健授業での「主体的・対話的で深い学び」を実現する手立て、「主体的・対話的で深い学び」をめざした中学校保健授業の改善（教授用資料）、9-16、大日本図書、2018
- 3) 佐伯胖：第5章 学びつづける存在としての人間、「学び」の構造、18版、163-207、東洋館出版社、1995
- 4) 田村学：確かな「振り返り」の実施、深い学び、初版第5刷、108-221、東洋館出版社、2019

学校保健 重点方針

生きる力を育む健康教育を推進する。

- 連携・協働しながら組織的に取り組む健康教育活動を展開する。
- 生徒の健康管理能力を育成するための養護教諭の支援の在り方について研修を進める。

学校保健 <上越地区／上越市中教研>

11月19日(水) 研究会開催

研究主題：自他を認め合い、対話を通して主体的に学ぶ心の健康教育

～伝え合う場を充実させる「課題設定」の工夫～

題材名：「3年：自分も相手も大切にすること
コミュニケーションのあり方を考えよう」

会場校：上越市立吉川中学校

公開：1学級

授業者：渡邊 高明（教諭）
竹内 美穂子（養護教諭）

指導者：学校法人北陸学園 講師 中村 直美 様
上越市教育委員会 指導主事 板垣 希望 様



研究推進責任者
上越市立頸城中学校
米山 優子



教科・領域担当者
上越市立吉川中学校
竹内 美穂子

こんな深い学びの姿を目指します

生徒の日常生活における他者との葛藤場面でどのような伝え方をすれば、お互いが気持ちよくコミュニケーションを取ることができるのか、グループ活動を通して、自他の気持ちへの気付きを促します。そして、様々な学校教育活動とのつながりを意識して生徒に問い、その場にあった適切なアサーティブな表現（自分も相手も大切にしたい自己表現）について深く考えようとする生徒の姿を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.3・8）

生徒の身近な場面と思考する観点を設定し、グループで意見を共有しながら多様な表現の仕方を比較して考える。

これにより、生徒は自他の気持ちを振り返り、自己表現のあり方を深く考えようとするようになります。

ポイント2（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

アサーティブな表現（相手も自分も大切にしたい自己表現）方法を理解して、上手な伝え方のコツを活用する。

これにより、生徒はお互いが気持ちよく伝え合うコツを生かし、円滑なコミュニケーションをとる方法をつかみます。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15）

アサーティブな表現方法をこれからの生活の中でどのように生かしていくか、自分の言葉でまとめる。

これにより、生徒はその場の状況に合わせてアサーティブな表現方法をどのように生かしていくか、自分の考えをまとめます。

単元(題材)の様子

よくある日常生活の葛藤場面を設定することで、自分事として、普段のコミュニケーションのあり方について問題意識をもたせます。

これにより、グループでの話し合い活動の中で、自分と相手それぞれの立場の気持ちへの気付きを促し、深い学びにつなげていきます。



プレ授業の様子

また、ワークシートや提示する資料を工夫することで、自分も相手も大切にしたい伝え方を引き出しながら深く考えようとする姿を目指します。



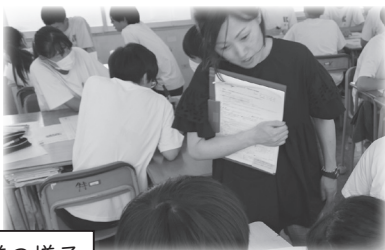
ポイント1

自分も相手も大切にしたい表現方法を知るために役割演技や生徒同士のロールプレイを取り入れます。

これにより、「普段使っている伝え方」「アサーティブな伝え方」を比較しながら、アサーティブな表現「伝え方のコツ」を上手く



プレ授業の様子



使って、流れに沿ってセリフを考えます。グループ内でのロールプレイや発表を通して全体で共有します。「伝え方のコツ」を使うことでどんな変化があったか考察していきます。

ポイント1・2

授業のまとめでは、これからの生活の中で、自分も相手も大切にするコミュニケーションについて個々で考えます。

これにより、その場にあった適切なアサーティブな表現を日常生活でどのように生かしていきたいか、これらの姿につなげていきます。



プレ授業の様子

ポイント3

研究会

生徒の身近な場面を設定することで『自分と相手』が共に気持ちのよい伝え方(アサーティブな表現)を考えます。

生徒一人一人が深い学びにつながるように、学習活動を『個人』⇒『グループ』⇒『全体』⇒『個人』と設定し授業を展開していきます。

生徒は、自他の気持ちと向き合い、自分の気持ちや意見などを率直に表現して伝えることで、よりよい人間関係が形成され、学んだことをこれからの生活の中で実践していこうとする姿を目指します。

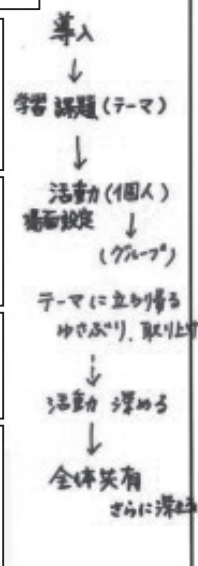
授業後の協議会から

場面設定
より現実的で自分事として考えられる内容にアサーティブなコミュニケーションを考えやすくなる設定に

多様な考えに触れる場面を使って、考えの幅を広げることになるように⇒発表で共有する⇒オプションを増やせる

グループワークを深めるために途中で気持ちを考える場面を取り上げて考えさせる

自分と他者の気持ちをもっと考えさせて、何と言うかを深める生徒の発言を取り上げ、教師がゆさぶりをかけてはどうか?



ポイント1・2・3

学校保健 <新潟地区／新潟市中教研>

11月13日(木) 研究会開催

研究主題：健康的な生活の行動化を促す保健教育
～ヘルスリテラシーの向上を目指して～
題 材 名：「2年：自分に合ったよりよい睡眠習慣を
見つけよう」

会 場 校：新潟市立東石山中学校

公 開：1学級

授 業 者：上野 雅（養護教諭）

指 導 者：新潟青陵大学大学院 教授 塚原 加寿子 様
新潟市教育委員会 指導主事 高橋 哲子 様



研究推進責任者
新潟市立新津第一中学校
養護教諭 渡邊 秋子



教科・領域担当者
新潟市立東石山中学校
養護教諭 上野 雅

こんな深い学びの姿を目指します

睡眠習慣の課題解決を題材にして、正しい健康情報を入手・理解し、活用していくヘルスリテラシーの向上とともに、他者と関わり合う学びを通して、自己の考えを深めていきます。健康行動における理解しているが実践できていないことへの気づきや、改善策の長所・短所を考え、評価する意思決定のスキルを習得させることで、実現可能なよりよい意思決定ができる生徒の姿を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8）

多様な意見や改善策を引き出すために、班編成や資料、発問を工夫する。

これにより、生徒自身が課題に気づき、相互に改善策を模索し、多面的・多角的な思考を促します。

ポイント2（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

課題を解決するためのよりよい意思決定につながるような活動を取り入れる。

これにより、生徒は意思決定のスキルを習得し、多様な意見や考えを基に自分の考えを再形成します。

ポイント3（評価の過程→「深い学びの技法」のNo.19）

思考の変容を振り返り、よりよい意思決定について考える時間を設定する。

これにより、生徒は自分の生活や価値観を振り返り、実現可能なよりよい意思決定へと導きます。

単元(題材)の様子

課題別班での活動を設定することで自分事として考えさせ、同じ課題でも多様な改善策や方法があることに気付かせます。知識や正しい情報を基に具体的な改善策についての意見交換を通して、相互に考えを広げます。

これにより、新たな視点を得たり、自分の考えと比較することでより考えを深めたりして、自分の課題や改善策について多面的・多角的に考えられるように促します。

ポイント1



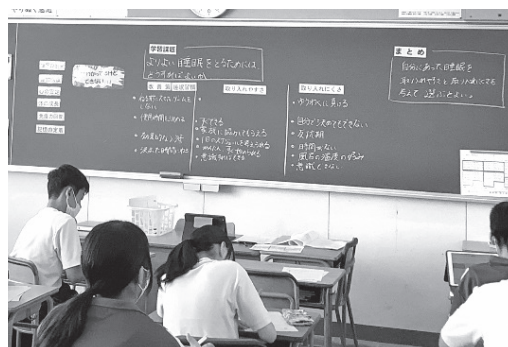
意見や情報を精査し、改善策の長所・短所を考え、評価する活動で意思決定につながる思考を可視化し、新たな改善策や考えを創造します。

これにより、意思決定のスキルの習得・向上とともに、多面的・多角的な見方や考え方へつなげ、よりよい意思決定や個々の価値観の形成へと導きます。

ポイント2

まとめ・振り返りでは、自分の生活や価値観に合ったよりよい意思決定をするために、自分の生活と照らし合わせたり、近い将来に直面するであろう場面を想像させたりして、活動を通して得られた学びと自己の関わりについて振り返ります。

これにより、知識や情報があっても自分の生活で実践できていないことがあることを意識させ、思考を再形成し、自分に合った実現可能な意思決定へと導きます。



ポイント3

研究会

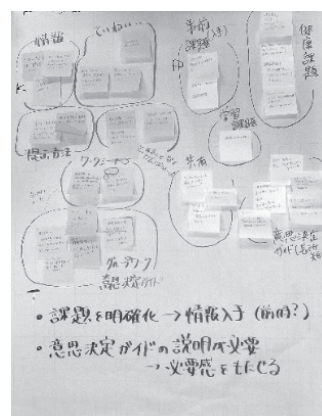
知識や自ら得た健康情報を入手・理解・評価するだけでなく、他者と関わり合う学びを通して自己の考えを深め、意思決定を行うことが行動化へとつながるのではないかと考えます。

生徒が保健教育での学びを通して、新たな気付きを得たり、自己理解を深めたりして、生涯を通じて健康的な生活を送ることのできる能力が身に付くことを目指しています。

ポイント1・2・3



分かっているけどできない・理解しているけど自分の生活をなかなか改善できない、そんな状況が正しい情報や新たな知識・視点によって健康的な行動へとつながる一助になればと考えます。



【文責：新潟市中教研学校保健部 県中担当研究推進委員長
新潟市立白根北中学校 養護教諭 武之内 聡美】

国語

言語活動を通した思考の
練り上げと個別最適な課題
設定の工夫で国語科の深い
学びを実現します！

深い学びの真骨頂は、
国語教材を通した考えの
練り上げです。練り上げ
が起こる授業の工夫と個
別最適な課題設定は、学
習者を能動的にさせ深い
学びを補完します。



全県部長
上越市立八千浦中学校
校長 渡辺 徳彦

▶上越地区／妙高市中教研

深い学びの技法の模索！！



研究推進責任者
妙高市立妙高中学校
寺島 佳子



教科・領域担当者
妙高市立妙高高原中学校
上山 晃平

生徒のよさや可能性を引き出すため、生徒が
主体的に課題を設定し、自ら課題解決の過程を
計画し、その解決に向けて取り組む「深い学び
の技法」を模索し、実践しました。2年次に向け、
研究を重ねていきます。

▶新潟地区／新潟市中教研

言葉と深く向き合うために！！



研究推進責任者
新潟市立関屋中学校
伊藤 篤志



教科・領域担当者
新潟市立内野中学校
川瀬 智子

生徒が題材の言葉と向き合い、その良さを自
らの表現に生かしていくために、他者との対話
を通して、どのように思考させていくかを模索
し実践を進めました。引き続き研究を進めてい
きます。

▶中越地区／燕市・西蒲原郡中教研

生徒の疑問を出発点にした授業づくり



研究推進責任者
燕市立吉田中学校
西脇 悠太



教科・領域担当者
燕市立燕中学校
齋藤 洋子

目指す姿を「生徒が自ら課題を考え、本文を
根拠に読解し、話し合いをつうじて考えを形成
する姿」とし、生徒が物語を自ら読み深める授
業を展開する。

▶下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研

生徒が学びを実感できる授業！



研究推進責任者
五泉市立五泉中学校
後藤 陽子



教科・領域担当者
五泉市立川東中学校
霜越 日和

3年間の物語教材を系統立てて授業をつくっ
ていきます。生徒が自分で学びの技法を身に付
けていける授業をめざし、部員全員で研修を進
めます。

数学

数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成する

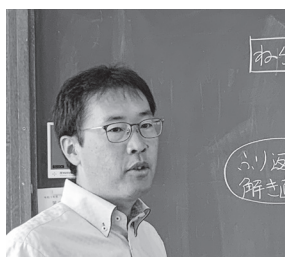
表題は指導要領数学科目標の柱書の文章です。次期指導要領の検討が進む中、この文章の意味を改めて見つめ直し、深い学びにいたる数学科授業の具現を目指していきたいと思います。



全県部長
小千谷市立片貝中学校
校長 山本 俊介

▶上越地区／柏崎市・刈羽郡中教研

深い学びを実現するために！



研究推進責任者
柏崎市立南中学校
大下 昇吾



教科・領域担当者
刈羽村立刈羽中学校
石澤 たえこ

授業時における先生方のこだわりを紹介し合い、目指す生徒の姿を共有するところからスタートしました。「深い学びの技法」を参考に、条件を変える活動を手立てとした授業を考えています。

▶中越地区／十日町市・中魚沼郡中教研

「全員参加型」で深い学びを！



研究推進責任者
十日町市立中里中学校
小島 啓介



教科・領域担当者
十日町市立中条中学校
小林 成夢

生徒一人一人が自らの考えをもち、主体的に学習に取り組むために有効な手立てを考え、研究を進めています。「全員参加型」の授業で深い学びの実現を目指します。

▶新潟地区／新潟市中教研

数学的な見方・考え方を具体的にします！



研究推進責任者
新潟市立白根第一中学校
細川 伸子



教科・領域担当者
新潟市立木戸中学校
宮井 誠

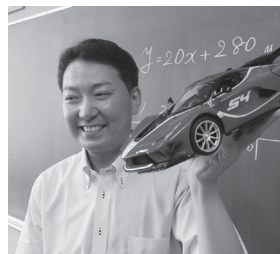
生徒が数学的な見方・考え方を働かせて数学的活動に取り組む授業を目指します。各単元、授業の中で働かせてほしい見方・考え方を具体的にした授業づくりを提案します。

▶下越地区／村上市・岩船郡中教研

活用・意味づけの段階へと進むためには！？



研究推進責任者
村上市立村上第一中学校
小松田 泰弘



教科・領域担当者
村上市立岩船中学校
佐藤 正実

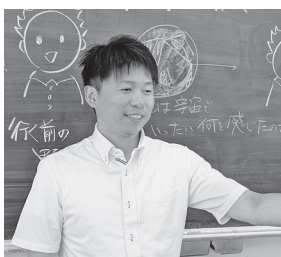
推進委員会では活用・意味づけの段階を重点として、生徒自身が「(現実での) 納得解を出す」「数学と日常がつながっているという実感をもつ」ための課題設定について研究を進めています。

道徳

課題を自分事として捉え、
多面的・多角的な理解をと
おして人間としての生き方につ
いて深く考える授業づくり

▶上越地区／上越市中教研

考えが深まる対話を目指して！



研究推進責任者
上越市立城東中学校
佐藤 皓



教科・領域担当者
上越市立名立中学校
夏井 日菜子

意見のシェアで終わらず、問いに対して議論し、多面的・多角的に考えを深める対話を実現させる授業デザインを目指し、公開授業や研修会を重ねています。

▶中越地区／長岡市・三島郡中教研

道徳における深い学びに向けて



研究推進責任者
長岡市立三島中学校
山口 和希



教科・領域担当者
長岡市立北辰中学校
北山 舜

これまでの実践に学び、「深い学び」にいたる手立てについて話し合い、今後の方向性について確認しました。生徒の道徳的諸価値の理解が深まる手立ての検討を重ねていきます。

課題について、自分事として捉え、対話や学び合いをとおして物事を広い視野から多面的・多角的に思考し、自己の生き方について深い学びにいたる授業づくりを推進します。



全県部長
新潟市立東新潟中学校
校長 和泉 哲章

▶新潟地区／新潟市中教研

対話を通して学びを深めよう！



研究推進責任者
新潟市立新津第一中学校
籠島 浩二



教科・領域担当者
新潟市立小須戸中学校
金安 雅夫

生徒に課題となる道徳的価値について考えさせ、クラス全員で対話をとおして、生き方についての学びを深めます。自ら発表し、様々な意見を聞く中で、多面的・多角的に考える姿勢を育成します。

▶下越地区／佐渡市中教研

主体的に考える生徒の育成



研究推進責任者
佐渡市立高千中学校
市橋 由希絵



教科・領域担当者
佐渡市立南佐渡中学校
多川 恵

互いの意見を尊重しながら考えを深め合う活動を取り入れています。生徒が自分自身の価値観と向き合いながら、答えのない問いに向き合う力を育みます。そのために「自分だったらどうするか」という自分事として考えることを大切にします。

技術・家庭

よりよい生活や社会を創造しようとする生徒の育成
～実体験や関わりを通した、
深い学びにいたる授業～

▶上越地区／上越市中教研

技術分野

体験で深める、技術と生活



研究推進責任者
上越市立城東中学校

水澤 学



教科・領域担当者
上越市立城西中学校

市村 尚史

生徒が主体的に実践的・体験的な活動に取り組み、日常生活での技術の活用につながる深い学びを促進し、技術の意義を実感できる授業を目指しています。

家庭分野

学びを深め、生活を問い直す



研究推進責任者
上越市立直江津中学校

大野 洋子



教科・領域担当者
上越市立城西中学校

佐藤 洋美

衣生活と消費生活を関連付けた題材づくりや教材開発を進めています。実践的・体験的な活動を通して、多様な考えを比較して思考を深めていく授業を目指します。

現在の生活や社会に関する自分を自分事として捉え、過去から未来への時間軸（主体的な学び）と、多様な考えに触れる平面軸（対話的な学び）との相乗効果より、深い学びにつながる授業を目指します。



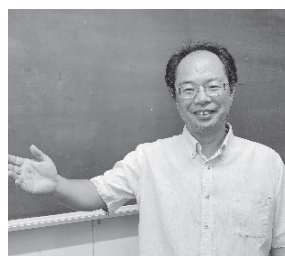
全県部長
胎内市立乙中学校

校長 藤原 明

▶新潟地区／新潟市中教研

技術分野

生活や社会と学びがつながるストーリー



研究推進責任者
新潟市立関屋中学校

古澤 康弘



教科・領域担当者
新潟市立早通中学校

加藤 宏章

生活や社会とつながるストーリーの中で課題を設定し、生徒が「自分事」として捉えることで、意欲的に実践・体験的な活動に取り組み、深い学びにいたる授業を目指していきます。

家庭分野

「思考」を深め「解決」に導く技法の工夫



研究推進責任者
新潟市立新潟柳都中学校

高柳 明理



教科・領域担当者
新潟市立光晴中学校

遠山 麻依子

「深い学びの技法」の「思考」と「解決」の学習過程に焦点を当て、生徒が様々な方法で思考を深め、仲間と練り合いながら、課題解決を図る授業を目指します。

美術

見方や考え方、そして、感じ方を深める授業

生徒がよさや美しさに「気付く」「感じる」「伝える」ことが豊かにできる授業に取り組めます。



全県部長
胎内市立築地中学校
校長 稲生 一徳

特別活動

望ましい人間関係や集団づくりのススメ

学校や集団の充実を目指して、対話や交流活動を重視し、考えを広げたり深めたりする場を設定します。



全県部長
新発田市立七葉中学校
校長 藤原 靖也

▶中越地区／三条市中教研

よりよいデザインを目指して



研究推進責任者
三条市立第二中学校
児玉 季恵



教科・領域担当者
三条市立大崎学園
松縄 舞

ICTを効果的に活用した授業について考えています。よりよい作品になるように他者との対話の中で練り上げた先にある「深い学び」を目指します。

▶上越地区

生徒一人一人が主役の活動！



研究推進責任者
上越市立城北中学校
高橋 沙友里



教科・領域担当者
上越市立潮陵中学校
鈴木 舞香

縦割り異学年交流を主軸にした特別活動の展開を目指します。小規模校の利点を生かして活動を進め、生徒一人一人が主役の話し合い活動の実現に向け、検討しています。

▶下越地区／新発田市中教研

伝統の美から学びを深める！



研究推進責任者
新発田市立東中学校
杉崎 浩子



教科・領域担当者
新発田市立猿橋中学校
石川 雅英

老舗和菓子職人から伝統の技と和の心を学びます。自然や四季、年中行事が表す色や香り、音等に注目し、五感を働かせて表現します。今を生きる生徒の感性が日本の伝統美に迫ります。

▶新潟地区／新潟市中教研

学級の課題を学級全員で解決！！



研究推進責任者
新潟市立宮浦中学校
中村 匡宏



教科・領域担当者
新潟市立葛塚中学校
渡邊 萌子

学級力アンケートをもとに、集団課題の解決と生徒の変容を捉える実践を継続的にを行います。対話的・主体的な学級づくりで資質・能力を育成することを目指します。

総合的な学習の時間

学んだ知識や技能を活用し、自らの考えを発信する姿の実現！

自ら地域課題を見だし、その解決のための方策を探る学習を通して育みたい資質・能力の具現化を図っていきます。



全県部長
新潟市立岩室中学校
校長 小塚 忠昭

▶中越地区／長岡市・三島郡中教研

深い学びにいたる探究的学習！



研究推進責任者
長岡市立越路中学校
丸山 英将

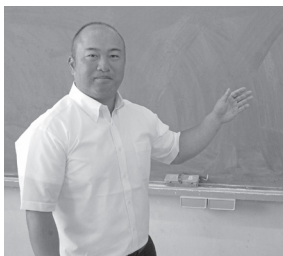


教科・領域担当者
長岡市立寺泊中学校
庭山 巧夢

未来の地域発展を考える総合的な学習に取り組んでいます。探究的活動を通して、地域の魅力発信や課題解決に主体的・協働的に取り組む生徒の姿を目指します。

▶下越地区／阿賀野市・胎内市・北蒲原郡中教研

課題を自分事として捉えるために



研究推進責任者
胎内市立乙中学校
佐藤 義美



教科・領域担当者
胎内市立築地中学校
大橋 正宗

探究的な学びを通して地域の未来について考えを深める生徒の育成を目指します。「地域の課題を自分事として捉える」ための手立てや働きかけについて研究を進めています。



編集後記

新潟県中学校教育研究会

理事長 鈴木 善士

(新潟市立木戸中学校 校長)



「深い学びの技法」を基に構成する学習過程の充実に着目して

国立教育政策研究所が公表した令和7年度全国学力・学習状況調査の結果によると、次のようなことが指摘されています。

- ・主体的・対話的で深い学びに取り組んだと考える児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られる。
- ・主体的・対話的で深い学びに取り組んだ児童生徒は、SES（家庭の社会経済的背景）が低い状況にあっても、各教科の正答率が高い傾向が見られる。

これらの傾向は、令和7年度に限った特筆すべき事象ではなく、ここ数年同様の指摘が見られます。学校教育が目指すべき方向を示すとともに、学力差の問題を家庭や地域の要因だけに求めてはならないという厳しい指摘にも聞こえます。

新潟県中学校教育研究会は、「深い学びの20の技法」を授業の手立てとして導入し、「深い学びにいたる授業」を目指して研究に取り組んできました。結果、授業改善の視点の明確化や、生徒の実態に合わせた柔軟な技法の選択等が研究の成果として報告されています。一方で、深い学びの技法が、本来は手段であるにもかかわらず目的化してしまったり、技法の種類が多すぎて学習課題や生徒の実態と結びつかなかったりする事例もみられました。

本年度は、研究主題を「深い学びにいたる授業～『深い学びの技法』を基に構成する学習過程に着目して～」と設定し、それを具現化するための3つの重点を掲げ研究に取り組んでいます。技法が単発的に手立てとして講じられるのではなく、生徒が情報を集約したり、考えを表現したり、課題を解決したりして学びを深めるように、生徒の学びの流れに合った手立てを講じるように改善し、生徒の学習過程の充実に着目して研究を進めていきます。「深い学びの技法」は生徒の学び方であるとともに、教師の「手立て」でもあります。「設定」「思考・解決・表現」「評価」という3つの学習過程の中で、深い学びの技法を適切に取り入れ、生徒自身が「深い学び」にいたったと実感できる授業こそ、今求められているものと考えます。

この度、京都大学大学院准教授 石井英真様より特別寄稿を頂戴いたしました。ご多用の中、ご寄稿賜りました石井英真様に深く感謝申し上げます。石井英真様は現在、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会の委員として、次期学習指導要領に向けた内容の重点化・構造化の在り方、学習評価の在り方等に関して、重要な検討の視点を提示されています。本稿寄稿文もいつでも読み返していただき、会員の皆様の授業づくりの参考にしていただければ幸いです。

本研究会は、2年間の指定研究推進事業と、その研究成果を全会員に伝える「授業情報誌 Class」の両輪でこれからも本県中学校の授業づくりを支えていきます。指定研究に携わられた関係者の皆様と、貴重な原稿を頂戴した各全県部長・副部長・指定研究会場校の皆様、各研修推進委員の皆様、編集に携わった事務局に感謝を申し上げ、編集後記といたします。